

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示

—— 広島平和記念資料館開館前後の状況について ——

はじめに

越前俊也

本稿の目的は広島平和記念資料館の初代館長・長岡省吾（一九〇一—一九七三）の功績を顕彰することにある。長岡に関しては、被爆資料の収集と分析によって空中爆心地を特定したことや平和記念資料館の前身に当たる原爆参考資料陳列室の開設したことなど、その業績についてこれまでも断片的もしくは伝記風の紹介はされてきた⁽¹⁾。しかし、その活動内容を精査した論文はなく、平和記念資料館においてすら、彼に関する記録はほとんど残されてこなかった。そうしたなか二〇一五年四月二〇日、長岡の遺族から彼が集めていた被爆資料ならびに平和記念資料館関係資料、約一一、八九〇点を平和記念資料館に寄託する申し出があり、歿後四五年来に迫る今日、ようやく彼の生涯を検証する条件が整いつつある⁽²⁾。本稿は、この新出資料を既存資料と照らし合わせることによって、長岡研究の端緒を開こうとするものである。

第一章では、長岡前半生の経歴を紹介しつつ、その不明な部分の解明を試みる。また、彼が被爆現場に対峙したときの模様を手記にもとづき紹介しつつ、その際の彼の思考連鎖の特徴を明らかにする。第二章は、長岡が被爆資料を収集、公開した当時の状況を、彼が参加した公式調査団による報告、原爆参考資料陳列室開設時の新聞記事、ならびに原爆記念館開館時の所蔵品リストによって示す。そしてそれらが彼の科学的関心のもとに進められたことを明示する。第三章は、長岡が次第に原爆による物的被害から人的被害に関心を示すようになったことを、原爆記念館発行による彼の著作物、東京の日赤本社で開催された原爆展、並びに同展出品のスライド上映のために彼が著したシナリオの分析を通して明らかにする。第四章は、広島平和記念資料館の開館時の条例と最初の展示状況を紹介する。そしてそれらが、必ずしも当時の長岡の意向に沿うものではなかったことを確認する。第五章は、一九五五年から五七年にかけて、広島を含む国内一〇箇所を巡回した原子力平和利用博覧会が平和記念資料館に及ぼした影響を分析する。第六章では、一九五八年に開催された広島復興大博覧会において平和記念資料館が原子力科学館とされたとき、長岡がそこで原爆被害の展示を堅持した事実を確認し、その意義を評価する。

以上のことから、一九四五年から五八年にかけて、長岡省吾が被爆資料を収集・公開・展示してきた状況を概観することができる。その結果、彼の被爆資料に対する考え方は、時代とともに変化したことが明らかになるであろう。その集大成と見做すことができる原子力科学館後の平和記念資料館の展示を分析、解釈するまでが、本稿の射程となる。

一、長岡前半生の経歴と原爆投下時の行動

一―一、満州における学歴と職歴

長岡省吾の経歴をまとめたかたちで紹介する文献は少ない。人物事典の類で唯一参照することができたのは、中国新聞社が一九八二年に発行しに『広島県大百科事典』にある以下の掲載内容である。

長岡省吾（ながおか しょうご） 一九〇一年（明治三四）八・一一―一九七三年（昭和四八）二・一。広島平和記念資料館（通称「原爆資料館」）の初代館長。地質学者。佐伯郡玖波町（現大竹市）の生まれ。一九三五年（昭和一〇）旧満州国（現中国東北）のハル賓露支語専門学校（地質学専攻）を卒業。以後、地質検査の業務を通じて陸軍特務機関、ハル賓博物館、地質学鉱物学研究所、満州鉱業（株）などに勤務ののち帰国。戦時中の一九四四年（昭和一九）から一九四七年（昭和二二）まで広島文理科大学地質学鉱物学嘱託を務め、一九四九年（昭和二四）原爆被災資料を収集と調査を実施する専門職として広島市役所に勤務。専門知識を生かして精力的に活動、一九五五年（昭和三〇）広島平和記念資料館開設と同時に同館長に就任。一九六二年（昭和三七）退職するまで現在の同館の基礎確立に大きな足跡を残した。著書に『HIROSHIMA-Hiroshima under Atomic bomb attack』（一九五四年七月三〇日 私家版）があるほか、爆心地調査論文などもある。^③

本節では、このうち長岡が満州から日本に帰国するまでの経歴を検証する。ここでまず目を引くのが、彼の学業終了年とその卒業校である。前者は、彼の年齢が三三歳であった一九三五年とされている。また、後者に関しては、管見の限り、「哈爾濱露支語専門学校」という名で地質学を講じた教育機関が歴史上存在した事実は確認できない。ところが、次節で扱う長岡の手記には、原爆投下時に「式拾数年、苦心した私の資料、化石鉱物類」を収集していたと記されている。つまり一九二〇年頃、すなわち、彼が二十歳の頃には、すでに少なくとも地質学を専攻していたことになる。一九世紀末から二〇世紀前半にかけて中国東北部にあった教育機関を網羅的に調査した中島毅によれば、当時同地において唯一地質学を専攻できた教育機関は、日本では東清鉄道の名で知られるロシア資本の中東鉄道が、自社の技術者養成を目的に、一九二〇年一〇月に開校した「露中技術専門学校」であった⁽⁴⁾。同校は、一九二二年四月に帝政ロシアの高等技術専門学校をモデルにカリキュラムを再編し、五年制、二学科からなる「露中工業大学(Русско-Китайский политехнический институт)」となる。二八年四月には、中国側に強制的に移管され、「東省特別区立工業学校」と改称。同年一月には、中ソ双方の代表からなる体制になり、「ハルビン工業大学」と再度改称された。さらには、一九三一年九月の満州事変後、日本側からの圧力が強まり、一九三六年四月には「哈爾濱高等工業学校」という和名で三度目の改称を強いられた。このように、複雑な再編と改称を繰り返したが、この時代のハルビンで地質学を専攻できた教育機関は同校をおいて他にない。したがって、「哈爾濱露支語専門学校」とは、この学校を日本語訳する際、便宜的につけた校名と考えるのが妥当であろう。すると、長岡は、技術者養成を目的とした同校で、ロシア語で地質学を学んだことになる。長岡の就学年数が長期におよんだ理由のひとつは、ここに求めることができるかもしれない。

満州における陸軍特務機関は、関東軍司令部の指揮下にあった。ハルピンにおける都市計画を詳細に調べた越沢明によれば、「満州事変後、関東軍を中心に満州全土の植民地政策の立案が精力的に進められ、それを担ったのが関東軍特務部と満鉄経済調査会であった」⁽⁵⁾。都市計画立案のためには、まず詳細な大縮尺の地形図が必要とされる。そのため、測量は一九三三年一月から翌三四年三月末まで実施された⁽⁶⁾。さらに、松花江の洪水に悩まされる同地に、一九三二年夏と三四年の夏に大洪水が襲う⁽⁷⁾。すなわち、一九三〇年代前半の同地にとって、測量と洪水からの復旧、ならびに防水工事のための地質調査は喫緊の課題であったことになる。長岡が就学中から陸軍特務機関の仕事に駆り出されていたとするならば、彼の卒業年次が遅れた第二の理由をここに求めることが可能であろう。さらに、一九三五年三月二三日には、ソ連が中東鉄道を満州国に売却する⁽⁸⁾。長岡の学校卒業年時に当たるこの年の社会情勢が、同地における実学としての地質学の需要を高めたことは、容易に想像がつく。

ハル濱博物館の建物は、ロシア帝国によって一八九八年に開拓された新市街（ノヴィゴロド）にモスクワの一流商店を出店させる勧商場として建てられた建造物であった。しかし、ロシア革命のため勧商場は実現せず、その建物は博物館に転用される⁽⁹⁾。同館は、歴史と自然史の二部門からなる総合博物館でハルピン工業大学の研究機関としても機能していた。つまり長岡が、ハル濱博物館に就労していたことは、その自然史部門で地質学の調査研究をしていたことを意味する。地質学鉱物学研究所の実態は不明であるが、満州鉍業（株）は、満州国内の鉍工業が一元的に統制される一九三七年まで存在した企業であった。したがって、長岡の職歴が、就労順に『事典』に記されていたとするならば、長岡がハルピンで職を得た時期は一九三七年までということになる。

一―二、「廃墟に佇つ」——原爆投下当日ならびに翌日の行動

生前長岡が、唯一、活字に残した私的な手記は、原爆投下の当日から翌日にかけて、彼が見聞し、自ら取った行動を書き残したものである。「廃墟に佇つ」と題されたそれは一九五〇年八月に地元の同人誌に発表され、次のように始まっていた。

私たちに忘れられない日——八月六日、朝はからりと晴れた良い天気であった。私は早起きの気質だが、連日の調査で疲れが出たのか、うとうととしていると（広島文理大の現職のまま暁部隊の本部に属し、山口県上ノ関町方面の地質調査に出張中だった）。ドン……という爆発音で眼をさました。朝早くから爆薬で壕掘りが初まった、と思つて時計を見ると、八時十七分を指していた。⁽¹⁰⁾

以下、当番兵から「岩国方面に火柱が上がり、目下燃焼しています」と報告があったこと、心配になって外に出てみると、「広島方面を見れば、暗雲と思われる入道雲が覆っている」様を目撃したことを記している。山口県上ノ関町は、広島市中心部から南西七三kmにある三方を瀬戸内海に囲まれた町（図1）である。ちなみに長岡が確認した八時十七分という時刻は、海面上の音速（約三四〇m/s）から計算して、広島における原爆投下時の八時一五分に一致する。岩国は、広島と上ノ関のほぼ中間点の西に位置し、長岡の自宅があった大竹は、岩国と隣接した広島寄りの町である。軍務の地質調査を打ち切り、本来の職場である広島文理大に向かうことを決めた長岡は、途上の柳井港（図1参照）や停車したままなかなか動かぬ汽車の中で「被害は想像以上」と感じ、不安を募らせてゆく。大竹の自宅の最



図1 広島-上ノ関間地図

寄りの玖波駅で知り合いに声をかけられたことから、初めて被害の甚大さを具体的に告げられ、この日は広島行きを諦め、無事であった妻子とともに自宅で夜を明かす。その夜の大竹を「町は恐怖が潮のように広がり、悲しみの町と化していた」と記している。

「翌早朝、家の者が止めるのを振り切って、広島に出発する」。以下、「草津付近の家の屋根瓦は波状に盛り上がっている」という記述に始まり、「古江付近は半壊。己斐に近づくにつれ燃え、全壊に近い」と、車窓から見える被害状況を冷静に観察している。「己斐駅に下車」後、徒歩になってからは、市街の被害状況よりも怪我人と死人に関する記述が増える。天満橋を渡ったところで出会った怪我人の描写でいえば、「衣服は焼かれ裸体になり、火傷のため頭髮はなく、血の滴る光頭、眼は飛び出し手足が折れ、火傷の苦しみに狂い廻っている。まさに地獄絵巻である」と綴っている。「ようやく、護国神社の入口に辿り着いた」のは「八時半」であった。当時の護国神社は基町にあり、爆心地の北三〇〇mに位置した神社であった。以下、次のように記している。

倒れずにいる鳥居を見た。もう歩くことはできない。入口の燈籠に腰をおろした。とたん掌に針で刺したような痛みを感じた。よく見ると、花崗岩の表面が溶けている。『アッ!』と驚いた。何度も見返したが、間違いな

く溶けている。普通ではない。特殊な爆弾だと感じた。急に気を取り戻し、大学へと急ぐ。

ここで、注目すべきは、彼が掌に感じた「痛み」から花崗岩の溶解に気づき、そこから即座に理性的判断に立ち戻った点である。前日には、「ドン……」という爆発音」で目を覚まし、「岩国方面に火柱」という曖昧な報告を「広島方面」の「入道雲」という自らの目視で修正した上、調査を打ち切り、広島行きを決めていた。感覚的刺激↓観察↓理性的判断という思考連鎖が護国神社においては瞬時に結実したのである。広島に向かう車窓からの眺めや駅に降りてから見た「地獄絵巻」にしても、冷静な観察眼を保っている。しかし、感情が麻痺してゆくなか、それらの場面に對する理性的判断は停止状態にあったといえる。ところが、文字通り「手にした」痛みで地質学者としての我に返り、当初の目的であった大学を目指している。

一時間あまりかけて辿り着いた大学では、「式拾教年、苦心した私の資料、化石鉱物類は焼けてポロポロになっていた。諦めてはいたものの、やはり諦めきれない。人生の大半を鉱物の授業につくしたのだ。資料を前にして涙がとどめなく流れる」とある。文中、唯一、涙を流す場面である。

帰路、アスファルト上に焼きついた、被爆時にそこを歩いていた人たちの「死の影」を見る。さらに、教え子を探し廻る老教師の姿に胸を詰まらせる。しかし、ここでも、判断を下したり、泣いたりはしない。知り合いに呼び止められ、その妻の遺骸をトタン板に乗せ仮の火葬場まで運ぶ。ここでも長岡の思考停止状態は続く。火葬のため「各所で燃える炎が悲哀の色を濃く映し出し……屍の町に夜明けを待った」。この一文で手記は閉じられている。

B5判の紙面にわずか二頁の短い文章である。しかし、ここに彼が後に被爆資料に対してとった態度が凝縮された

かたちで現れている。すなわち、市街の破壊、岩石の溶解、そして人体損傷とその焼失（「死の影」と「火葬」）が順を追って短い文章で的確に記されている。そして、それらを観察・描写するきっかけとなった起点に聴覚と触覚が受けた刺激があったことをとりわけ印象深く書き止めている。

一―三、終戦前後の職歴と専門領域——広島文理科大学地質学鉱物学専攻嘱託

原爆投下時、長岡が所属していた広島文理科大学は一九二九年四月に設立、三一年一〇月に開学した官立の旧制大学であった。四三年一〇月に地学科地質鉱物学専攻が設置される。同校五〇年史によれば、授業としての地質学講座が開講したのは同年一二月の今村外治の着任によっていた。ところが翌四四年六月、今村は京都帝大に転出する。後の梅垣嘉治の着任は同年九月であった¹¹⁾。したがって、先に挙げた『事典』で、長岡が「戦時中の一九四四年（昭和一九）から」同校嘱託を務めたとしているのは、この間の人事異動にもなったと推察される。長岡が同校に着任して間もなく、同教室の図書的大部分と標本・顕微鏡類は、長岡の斡旋により彼の自宅があった玖波町に疎開する¹²⁾。終戦間際の四五年六月には、岩石学担当助教授として小島丈児が着任した¹³⁾。

小島は着任早々の四五年九月、次節で触れる原子爆弾災害調査研究特別委員会・地学班に名を連ねる。調査内容の詳細は後に譲るが、問題は小島が公式の調査報告が出版された直後に、改めて「石材と屋根瓦の被害から見た原爆」と題した修正論文を寄稿している点である¹⁴⁾。岩石学の専門家として小島は被爆石の研究に近い位置にあった。それに対し、先の手記で「私の資料、化石鉱物類」と述懐しているよう、当時の長岡は化石や古代生物を専門にした可能性がある。マンモスなど古代生物が豊富な満州で学生時代を過ごし、哈爾濱博物館に勤めた職歴は、彼がその領域を

専門とした蓋然性を高めている。岩石の高熱による状態変化の観察と分析に関しては、少なくとも原爆投下の時点で、長岡より小島に一日の長があったと思われる。

とはいえ、戦後の四六年四月の地質学講座の授業再開に際し、資料疎開先の玖波国民学校が同大学地学科の分室となった¹⁵⁾。かほど、長岡は同教室の存続に貢献した。しかし四八年六月、元京城帝国大学教授兼朝鮮総督府地質調査所技師の木野崎吉郎が広島文理科大学鉱物学・鉱床学担当教授に着任する¹⁶⁾。これにより長岡の同教室における授業担当はなくなったようである。『広島県大百科事典』は長岡の文理科大への勤務を一九四七年までとしているが、それは学年歴の四七年度末、すなわち、木野崎が就任した四八年六月より前の春を意味するものと思われる。

二、被爆資料の収集と公開

二―一、石材及窯業製品等の収集——原子爆弾災害調査研究特別委員会地学班

一九四五年九月一四日、日本学術会議は「原子爆弾災害調査研究特別委員会」を設置した¹⁷⁾。その日のうちに「物理化学地学科会」を含む九つの分科会と二八名の委員が発表される。地学班委員には、東京帝国大学の渡辺武男が選ばれ、その地質調査に関わる七名に長岡の名があった¹⁸⁾。七名のうち現地調査を行ったのは、渡辺、長岡と東京帝国大学の山崎正男の三名のみである。この折の渡辺の調査内容を一次資料から精査した田賀井篤平によれば、彼ら地学班三名は地理班三名とともに同年一〇月一日から三日間かけ広島を調査した。その方針は「地質の研究者が通常行っている調査方法をそのまま実行し、原子爆弾によっていろいろなものがどのように変化しているかを地図上に正確

に表していく」¹⁹⁾ものであった。広島調査の最終日、メンバーは玖波の長岡宅に泊まる。そして、その晩の話し合いで、長岡の長崎調査同行が決まる。彼らは一〇月一五日から四日間、長崎で同様の調査を行った。

これらの調査結果は、同年一月三〇日に開催された原子爆弾災害調査研究特別委員会第一回報告会で渡辺によって発表される。翌四六年二月二八日に第二回報告会があったが、地学班の発表内容は第一回とほとんど変わらなかった²⁰⁾。報告会はこの二回で終了となり、その内容をもとに五年に『原子爆弾災害調査報告書 総括編』、五三年には、『原子爆弾災害調査報告集』二分冊（以下、『報告集』と表記）が、日本学術会議から刊行される。翌年には、その英語版も出版された²¹⁾。つまり、これらに掲載された地学班の報告は、出版まで七乃至九年が経過していたにもかかわらず、最初の調査内容の分析を踏襲するものであった。

その概略は、以下のとおりである。地学班は、現地調査に赴き、「平素研究の対象として取り扱っている岩石類や窯業製品等が原子爆弾の爆発の影響を著しく蒙っていることを知った」²²⁾。熔解や石はね現象を示すそれらは、「爆心地付近においてその影響が最大で、これを遠ざかるにしたがい、その影響が弱まること明らかになった」²³⁾。そこから、「原子爆弾の爆発中心地等を想定できることも明らかになった」²⁴⁾。また、熔解安山岩の薄片を顕微鏡観察した結果、そこには、著しく不均質で気泡に富み、色と屈折率も様々に異なるガラス状に変化した熔解が認められた。それを短時間で熔解した原子爆弾特有の現象と導き出すこともできた²⁵⁾。さらには、「例えば屋根瓦の熔融の範囲は、広島より長崎の方が範囲が広い」²⁶⁾ことから、原子爆弾によって、「長崎市の方が、広島市の場合より強い変化をうけ

ている」⁸⁰という結論を導き出している。

先に挙げた田賀井が明らかにしたように、『報告集』に掲載された地学班の文面は、渡辺による草稿とほぼ一致する⁸⁰。したがって文責は渡辺にあったと見做してよい。広島に関する内容は「緒言」に始まり、「調査および研究方法」を説明した後、広島市域一帯の「地質概観」を述べ、「石材及窯業製品等に及ぼした影響」を報告している。挿図は、花崗岩に表面剥離した範囲（一〇〇〇m）と瓦が溶けた範囲（六〇〇m）を爆心からの同心円で示す「広島市原爆被災地区略図」（図2）に始まる。次に墓石や橋柱に使われた石材の剥離を示す通常写真があり、花崗岩中の黒雲母の結晶融解を示す拡大写真（図3）、安山岩熔解を写す顕微鏡写真が続く。すなわち、巨視的な視点から、通常

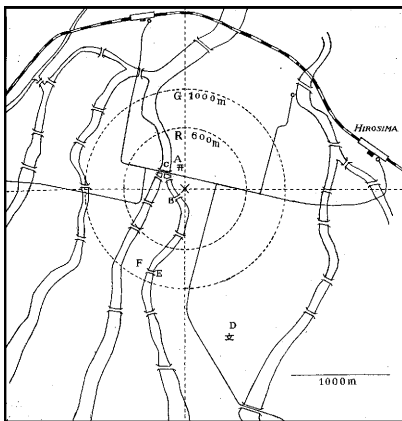


図2 広島市原爆被災地区略図

- A. 護国神社 B. 元安橋
- C. 相生橋 D. 広島文理科大学
- E. 萬代橋 F. 広島県庁
- G. 花崗岩の剥離の認められる範囲
- R. 瓦のとけた範囲

視と近接視を経て、微視的な図解に移っている。そして、アスファルトに焼きついた通行人の「死の影」の写真（図4）に至る。それはまた、長岡が手記「廃墟に佇つ」で記した、広島市外から徐々に市内中心部に近づき、爆心近くの護国神社で異様な花崗岩に接した後、失意の帰路で「死の影」を見た順番に合致する。したがって、たとえ『報告集』地学班の文責は渡辺武男にあり、当時の長岡の専門領域が岩石学でなかったとしても、調査の導き手として彼が大きな役割を果たしたことが、『報告集』の文章構成と挿図の順番から推し量ることが

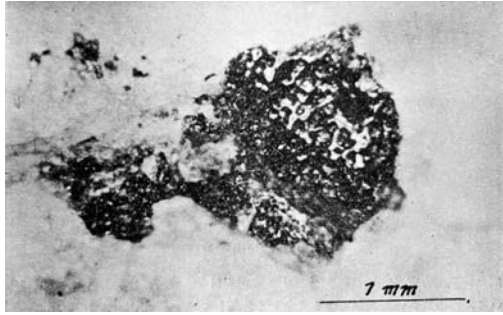


図3 広島元安橋附近で採集した黒雲母花崗岩、黒雲母の結晶が熔融している有様（約30倍）



図4 広島萬代橋の「死の影」

できる。

前章で見たよう、長岡の被爆石に対する関心は原爆投下翌日に始まっていた。本節で見たよう、組織的な学術調査は、そのひと月後に始まり、ひと月半で結論を出し、その後進展しなかった。被爆石材や窯業製品の収集を継続し、調査の精度が上がるのは、長岡のその後の個人的努力に負っていた。

二―二、被爆採集資料の公開——原爆参考資料陳列室の開設

一九四九年九月二十九日、『中国新聞』朝刊は、「眼みはる原爆資料——基町中央公民館に見学客おしかく」という見出しのもと、「原爆参考資料陳列室」開設を伝える記事（図5）を掲載した。内容は以下のとおりである。

広島のに幾多のナゾや奇跡を残し、専門家の研究や観光客の参観に垂えんの的となつてゐる原爆参考資料陳列室をこのほど市では暫定的に基町中央公民館内に開設した。【写真は陳列室一部】市では被災以来原爆に関する



図5 原爆参考資料陳列室開室を伝える『中国新聞』1949年9月29日朝刊。写真提供：中国新聞社

以上が全文である。ここから「原爆参考資料陳列室」に関し、少なくとも以下四点のことがわかってくる。①長岡は、一九四八年秋から市の嘱託として同室開設に取り組んでいた（これは「一九四九年から… 広島市役所に勤務」とした『広島県大百科事典』の記述と異なる）。②同室陳列資料は、新たに建設される平和記念館に移すことになっていた。③同室陳列資料は、岩石や植物など採集物が大半で、その数はこの時点で六〇〇から七〇〇点であった。④「幾多のナゾや奇跡」という言い廻しや「放射能ムラ」という記述に見られるよう、被曝に関する当時の一般的理解

る各資料を集めており、昨秋からは元広島文理大地質鉱物学教室嘱託長岡省吾氏が市嘱託として中心となり収集整理を続け、全資料は将来平和記念館が建設された際は同館内に陳列される予定であるが、とりあえず予算がないため公民館の一室で机のうえにならべて設備は貧弱ながら公開することになったもの。陳列品は岩石、かわら、コンクリート、植物類六、七百点のほか、被害統計表などで、おそらく部屋は小さくても世界随意一の収集室だと関係者は語っている。陳列された焼瓦や変形岩石により放射能ムラがあり、瞬間的な各種の影がはつきり残り、断焼熔解上の変化など原爆の奇異が素人眼にも確かめられるので内外人が開設以来早くも多数訪れている。

は、憶測と誤解に満ちていた。

一方、この記事の隣には「シリカ・ガラス送れ 南豪博物館から懇請状」という見出しのもと、シドニーの博物館から同室宛に、被爆によりガラス質に変わった鉱物送付の要請があったことを伝えている³⁰。すなわち、⑤開設の時点で、同室は研究機関として海外から認知されていた。そこに長岡が寄与していたことは容易に想像がつく。「原爆参考資料陳列室」は以上のような状況で、一九四九年九月二十八日以前に開設したのである。

ところで、冒頭で述べた長岡の遺族からの寄託資料には、『ひろしま公民館報 第1号』（広島市中央公民館、昭和二九年一〇月一〇日発行、以下『公民館報』と表記）が含まれていた。そこには、平面図（図6）をはじめとする同館の基本情報が掲載されていて、新たに以下ことが明らかになった。⑥中央公民館は、一九四九年七月三二日に設立された。⑦同館は木造平屋、建坪二四二・七五坪であった。⑧このうち、原爆参考資料陳列室として使用されたのは、先の『中国新聞』掲載の写真や、部屋用途

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示

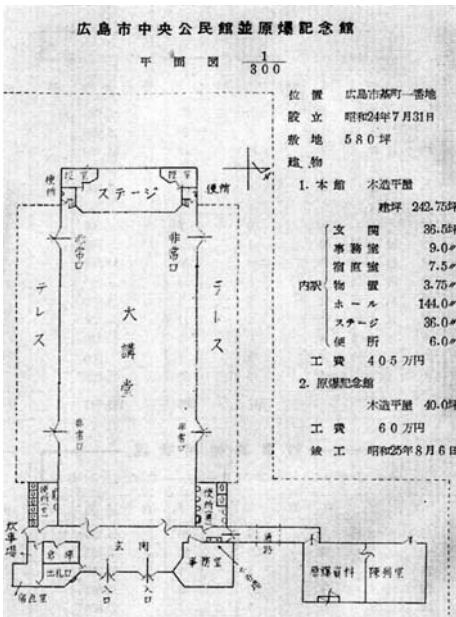


図6 広島市中央公民館原爆記念館平面図

から考え、倉庫（三・七五坪）であった蓋然性が高い。さらに、原爆記念館の竣工日が昭和二五年八月六日とあるため、⑨原爆参考資料陳列室開設期間は、一九四九年九月下旬から五〇年八月初めまでの約一〇ヶ月であった。以上九点を原爆参考資料陳列室の基本情報として抑えることができる。

一九四九年二月に広島市が、市長と市議会議長の連名で作成した「請願書」には、平和記念公園内に建てる平和会館に「陳列室」を設けることを謳っている。その設置趣旨は「原子爆弾災害の一切の資料を収集して世界平和愛好者の参考及び研究に供する」⁽⁸⁾ためであった。すなわち、その収集対象は原爆被災資料に限られていた。次に、その来室者には、専門家や海外の研究者を想定していた。そうした施設として、「陳列室」の設置を考えていた。先の記事にあるように四八年秋から長岡が市の嘱託として働いていたならば、この文案は、彼の存在があったからこそ生まれたものと考えざるをえない。当時広島市長であった浜井信三が、四八年秋以前に長岡の研究の重要性を認識して作成された設置趣旨と推し量ることができる。暫定的にでも、いち早く原爆参考資料陳列室が開設されたのは、当時の長岡の熱意と、それを受け止めた浜井の信頼と期待の篤さに由来すると思われることができる。

二一三、原爆記念館の開館

一九五〇年八月六日に竣工した原爆記念館（図7）は、前節で述べた



図7 基町の原爆記念館（1952年）
撮影：岩波映画製作所

【表1】原爆資料保管簿 広島市 原爆記念館

	適用	数量
1	原爆写真 A No.1-90	90
2	原爆写真 B No.1-60	60
3	傾斜儀	1
4	製図器	1
5	縮尺	1
6	雲形定規	1
7	写真帳	3
8	瓦岩石 A No.1-283	283
9	瓦 B No.1-554	554
10	瓦岩石 C(長崎市)No.1-18	18
11	瓦 B 特 Np.1-10	10
12	陶器ガラス D No.1-20	20
13	B 特 No.1-5 (花崗岩)	5
14	安山岩礫 No.1-500	500

註：通し番号は便宜的につけた。原簿には「受入年月日」「物品取扱主任印」などの項目が載っていたが、未記入であったため割愛した。

『公民館報』掲載の平面図（図6）にあるよう、中央公民館に増設された建物であった。本館とは通路でつながり、図面には「原爆資料陳列室」と記されている。つまりそれは中央公民館内にある部屋の名称に過ぎない。組織的には、あくまでも中央公民館に属していた。とはいえ、本館とは別に入出口を持つ「原爆記念館」と名乗り、Atomic Bomb Memorial Hall という看板も掲げていた。建坪は四〇坪（約一三二㎡）で、正方形の部屋ふたつを併置したつくりであった。そこから一部屋一辺の長さは、四間半（約八・二m）であったと算出できる。

長岡の遺族からの寄託品には、「原爆資料館保管簿 広島市 原爆記念館」と題された台帳が含まれている。それを翻刻したものが【表1】である。台帳に日付の記載はないが、一、二番にある一五〇枚の写真と三番から七番にあるわずかな備品、そして八番以下の被爆鉦物等がそのすべてであることから、開館当初に作成されたと推定できる。そのうち、一〇番には長崎市の被爆瓦や岩石も含まれている。広島が被災した規模を示すために、長崎との比較を重視した現れである。被爆鉦物類の総数は一、三九〇点で、原爆参考資料陳列室開設時からほぼ倍増している。

一方、広島市公文書館には、一九五〇年六

【表2】平和会館陳列室 陳列物品一覧表

1950. 6. 27

	種別 項目	壁面積 (㎡)	床面積 (㎡)	内容
1	写真	112.5	36	被爆前写真 100 点、被爆後写真 350 枚、現況航空写真 (6×6 m 床置き)
2	被爆物品		160	瓦、石、硝子等 2000 点 (大部分は 50 cm 乃至 5 cm の間)、建築物端片 15 点 (沢山の硝子により傷つけられた壁面、沢山の硝子のささった柱、放射線の影響を受けた工作物等)
3	模型		168	広島全景 3 点 (戦災前、戦災直後、将来計画)、被爆建造物模型 15 点 (産業奨励館模型、広島城模型、相生橋模型)
4	地図	390		1 万分の 1 地図 50 枚、5 千分の 1 地図 20 枚 (地図により爆心位置、爆心よりの距離、爆風の影響、気象学との関係、放射線の距離的・時間的推移等を説明す)
5	統計グラフ	80		20 枚 (地点別、被害、放射能の時間的推移等を示す)
6	医療関係		50	200 点 (標本、被害模型等)
7	遺留品	60	30	50 点 (衣服、所持品等)
8	植物		55	被爆せる樹木、花の枯死せるもの (遺伝関係の変化を示すため、被爆植物と非被爆植物を併列する)
9	絵画	22.5		50 点 (被爆状況に関係せる絵画、各階層の人々により画かれたるものを陳列す)
10	広島長崎比較	31.5	10	被害比較地図グラフ 3 面、長崎被害写真全紙大 10 枚、半紙大 20 枚
11	原子科学関係資料	60	5	原子科学に関するパノラマ 10 枚、原子研物に関する図面、グラフ 5 面、原子研物 25 点 (放射能検出器、原子科学関係写真、原子力の文化生活への利用想像図等)
12	記録文献		20	100 冊 (現在迄に残された記録、文献等を蒐集陳列す)
13	事務室、研究室等			
	合計	756.5	534	

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示

月二七日付けで市が作成した「平和会館陳列室 陳列物品一覧」が保管されている。陳列館の実施設計終了直後に提出されたもので、その中身を具体化するため一覧にされたものであろう。と同時に原爆記念館竣工ひと月余り前に作成されたという意味で、同館開設時の資料【表1】に、何を加えようとしていたかを伝える一覧にもなっている。この時期、広島市関係者でこれを作成できたのは長岡において他に考え難い。

内訳は、【表2】のとおりである。まず目を引くのは、瓦、石、硝子等二、〇〇〇点をはじめとする「被爆物品」が、点数的にも床面積（一六〇㎡）の上でも、「医療関係」（五〇㎡）や「遺留品」（三〇㎡）など他の被爆資料を圧倒している点である。また、「原爆資料館保管簿」に記載された被爆鉍物類が、一、三九〇点であることから、二、〇〇〇という数字は、原爆記念館開館後も、その収集を続ける姿勢を示している。

注目すべきは、それと同等以上の床面積（一六八㎡）を「模型（広島全景三点、被爆建造物模型一五点）」に割こうとしている点である。すなわち、まず、岩石や瓦類が原爆の熱線によって生じた表面変化を実物資料で示す。それを受けて、市街全体が原爆により被った物理的变化を模型によって示そうとする狙いである。その結果、岩石や瓦類のミクロ的变化が見る者の痛点などの身体感覚に訴え、それが市域全体の被ったマクロの状態変化の把握に連動することを想定している。これは、長岡が「廢墟に佇つ」で綴った「感覚的刺激↓観察↓理性的判断という思考連鎖」と同じものでもある。それはまた、実物資料や模型の存在感と、手を伸ばせば触れることができるという潜在的触知可能性に依拠したプランでもある。「陳列物品一覧」作成者、おそらくは長岡であろうこの人物は、少なくとも五〇年六月の時点で、こうした点を重視した資料配置を構想していた。

二一四、広島全景模型と解説図板の導入——一九五二年の原爆記念館

原爆記念館に関しては、岩波写真文庫のうち『広島—戦争と都市』取材班が、一九五二年の春から夏にかけて撮影した鮮明な写真が四枚公刊されている²⁸⁾。そのうちの一枚は、同館第一室入口付近から斜め奥にカメラを向けて撮影した写真(図8)である。目を引くのは、画面の下およそ三分の一を占める被災した市街模型である。その寸法は、原爆記念館一室一辺の寸法(11.8・2m)から考えて、5m四方に近い規模であったと推定できる。それは、「平和



図8 原爆記念館内部(1952年)

撮影：岩波映画製作所

会館陳列室 陳列物品一覧」【表2】の3にある広島全景模型(戦災直後)に先んじたものであった。長岡はそれに執着し、先行的に実現させた。壁沿いに設置されたのぞきケースのなかの岩石類と市街模型を見較べることによって、来館者の触覚から概念的把握を連動させる工夫である。

同じ写真の壁に目を転じると、第二室への入口上に、扁額のように吊るされた縦書きの図板(解説パネル)が見える。太字で記された「爆発時の状況」と「爆心の位置」という見出しは、次章で触れる長岡が一九五四年に執筆した解説書の第一と第二の見出しと一致する。左側壁面中ほどに写る図板には「原子爆弾爆発」の文字が日英併記され、その内容が図解されている。これらは、市街被災模型を来館者に見せ、被害状況の全体像を把握させた後、彼らにその原因となった爆弾を物理学的に説く意味合いがあ

る。注目すべきは、第二室の最初に見える図板に「ウラニウム」と書かれ、ここにも大きな図解がされている点である。【表2】に「原子科学関係資料」の項目があるよう、原爆記念館においてすでに、原子物理学の基礎に関する啓蒙が行われていた。岩波写真文庫取材班が捉えた写真は、その証左になっている。

壁の最も高い位置には同規格の額が吊るされ、そのそれぞれに二から四枚の写真が掲出されている。将来的に陳列館で公開される「陳列物品一覧」【表2】にある写真一点の寸法は五〇cm四方と算出できる⁸³が、ここでは、そのような引き伸ばしはされていない。【表2】第一項目にある「被爆後写真三五〇枚」をそのまま掲出したのであろう。それらを一つひとつ見ることは、来館者に時間と忍耐を求めらることを意味する。原爆記念館においては、原子物理学の啓蒙に力を入れる一方、原爆被災者に対しては、充分とはいえる紹介の仕方をしていなかった。

三、人的被害への眼差し

三―一、市街荒廃と人体損傷の視覚的対比——HIROSHIMA under Atomic bomb attack の刊行

一九五四年八月六日、竣工四年目にあたるこの日、原爆記念館は長岡省吾による英日併記著書 *HIROSHIMA-Hiroshima under Atomic bomb attack* (以下、*HIROSHIMA* と表記) を発行した。邦題は『ひろしま 原子爆弾による被害状況』とされている。つまり、英文タイトルでは *attack* としているものを邦題では「被害」と書き換え、原爆投下の受け止め方の差を使用言語によって鮮明に使い分けている。内容は、広島における原爆投下の結果を伝える刊行物

で、英文二〇頁、写真掲載頁は見返しも含め三六頁、和文一〇頁からなっている。本文は、客観的な記述と統計の分析にもとづくが、それもさることながら、豊富な掲載写真によって、原爆投下の結果を視覚的に訴えるところに本書の特徴がある。

文章の書き出しは、「昭和20年8月6日。午前8時15分。晴天無風状態⁸⁴」である。すなわち、手記「廢墟に佇つ」と同様、その日広島が晴朗であったことを最初に伝えている。快晴無風の真夏の朝「ドン……」という爆発音で眼をさました」回想で始まる手記に対し、HIROSHIMAの記述は、その日の朝、米国陸軍機B29三機が飛来し、うち一機が市を中心部に原子爆弾を投弾したという日本陸軍高射砲隊の観測報告によっている⁸⁵。「爆発当時の状況」と題されたこの最初の節では、以下、地上約五七〇mで爆弾は炸裂し、直径約六〇mの火球を生じたこと、その温度は、三〇万度に達したこと、それにもなう火焰によって、広島市の約四割が放射性物質に覆われたことが、米原子力委員会の資料にもとづき記されている⁸⁶。それに続いて長岡が「熱線の遮断物に依り生じた影」⁸⁷六、五三四点の方角と仰角を測定した結果、空中爆心地を特定したことを記している。ここに、日本学術会議の公式調査以降、長岡が一人で行った研究成果が示されている。

それに加え、掲載された写真の順番とレイアウトから、被爆に対する長岡の関心の広がりを読み取ることができる。掲載図版は、広島市



図9 広島航空写真：長岡省吾『HIROSHIMA』（1954年）より

全域を写した航空写真(図9)に始まる。一頁めくると「原子雲」の写真になる。さらに一頁めくると、「廃墟と化した広島全市」のパノラマ写真(図10)が折り込み掲載されている。視線は徐々に市中に入り、中景から建物個々を捉えた写真が続く。そして、被爆した市街の中景写真二枚と被爆者収容施設を遠目に捉えた写真二枚を同じ紙面にレイアウトした頁(図11)が現れる。この後、視線は徐々に被爆者個々に近づき、熱線によりケロイドが生じた被爆者の近接写真、さらには墓石の剥離の影やアスファルトに焼き付いた「死の影」の頁(図4)へとつな

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示



図10 廃墟と化した広島全市：長岡省吾『HIROSHIMA』(1954年)より

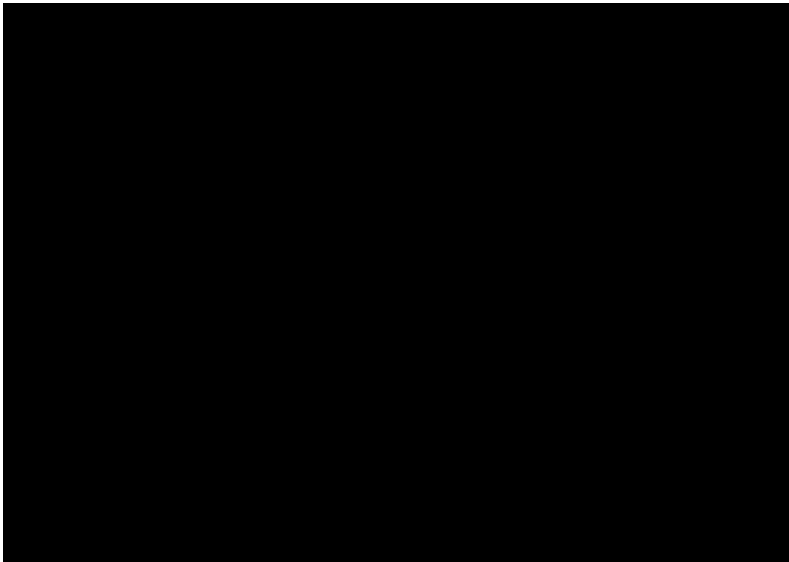


図11 被災した広島市街および被爆者収容施設：長岡省吾『HIROSHIMA』(1954年)より

がつてゆく。すなわち、同書は原爆による広島島の被害状況を、市街全域や建物の荒廃写真から始め、人体の状態変化へと読者の視線を導いている。

本文でも「人体障害作用」という見出しを設け、原子爆弾症を射熱症と外傷と放射能症の三つに分けて捉えている。さらには、死者と負傷者の総数を示すにとどめず、男女別に都道府県別生存者数を一桁に至るまで数え挙げた一覧表を掲載している⁸⁸⁾。被爆後を生きたる人を伝える発想は五〇年六月作成の「陳列物品一覧」【表2】にはなかった。それに対し、HIROSHIMAでは、被爆後を生きたる人に向き合い、彼らのことを伝える姿勢を端的に示している。

三―二、人的被害への注意喚起——東京原爆展

HIROSHIMAの出版から四ヶ月近くが経過した一九五四年一月二五日から二月三日にかけて、東京都港区芝にある日本赤十字社の本社講堂において「広島・長崎原爆資料公開展」が開催された。広島では「東京原爆展」と通称される本展の主催者は、日本赤十字社と被爆二都市の三者であった。開催趣旨は、「広島や長崎の原爆被害の実相を明らかにし、原水爆使用禁止に関する世論喚起に資するとともに、原爆障害者治療対策の重要性を強調し、政府の支援を強力に要請すること」⁸⁹⁾にあった。

この年のはじめ、日本赤十字中央病院院長には、都築正男が就任している。彼は、一九四五年八月に原爆症患者を最初に認定した医師であったばかりでなく、五四年三月一日にビキニ環礁の水爆実験で第五福竜丸が被災した際、医

学調査を行い、衆議院や赤十字国際会議において証言した医師でもあった。彼はまた、五三年一〇月一三日には広島県医師会館で外科関係原爆障害者三〇名を診察し、翌一四日には広島市民病院で三名の公開手術を行った原爆被災者治療の第一人者であった⁽⁴⁰⁾。一方、広島・長崎両市関係者は、五四年、原爆被災者の治療費に関する協議を重ね、同年九月に厚生省からようやく初めて原爆治療対策費を勝ちとったばかりであった⁽⁴¹⁾。こうした状況のなか、三者の思いが一致して本展が開催される。ここでは新聞報道によれば、「広島で“ピカドン”をうけ一瞬にして灰と消えた勤労者学徒のナマヅメ、皮膚の一部など生々しい資料や、長崎市浦上天主堂の“アンジェラスの鐘”の破片、故永井博士の遺品などをはじめ、当時の悲惨な状況を思い起こさせる被災物百十点、それに写真、図版、スライドなど四百八点が展示」⁽⁴²⁾された。

長岡の遺族の寄託資料のなかには、本展に出品された資料一覧が含まれている。それを翻刻したものが【表3】である。これを先に挙げた五〇年六月作成の「平和会館陳列室 陳列物品一覧」【表2】と対比することによって、原爆記念館開設から四年を経て、被爆資料の捉え方とその見せ方に関する意識の変化を浮き彫りにすることができる。

まず、指摘しておかなければならないことは、両者の間には「陳列」から「展示」へと展覧会用語の変化が認められることである。一般に、「展示」という言葉は、単にものを並べた公開を意味する「陳列」に代わって、並べる順番や置き方を工夫することによって、観覧者に対する誘導と啓蒙を行う語として、昭和三〇年（一九五五）頃から多く用いられるようになったとされている⁽⁴³⁾。したがって、一九五〇年作成の【表2】と五四年作成の【表3】の間に

【表3】東京原爆展・展示資料一覧

A. 一般的展示資料

1. 図板	1. 趣意書	4尺×6尺 1枚
	2. 日本地図及び被曝生存者表（広島・長崎）	6尺×9尺 1枚
	3. 原爆爆破状況（広島市のみ）	
	4. 原爆被害状況（「上下水道被害状況」等12項目）	3尺×3尺 12枚
2. 写真	1. 原爆直後の広島市（原爆前の広島市写真）	1.8尺×2.2尺 100枚
	2. 原爆当時の被害状況	
	3. 被災物	
	4. 原爆障害者関係	
3. 説明書	1. 出品現物に対するもの	100点
	2. 写真に対するもの	100点
4. スライド	原爆と広島	テープ2巻（吹き込み料）

B. 被災物（一般）展示資料

衣類 5点、時計 2点、竹 4点、立体模型 1点、靴 1点、馬皮ケロイド 1点、馬の眼球 1点、布の爆疫 1点、人骨と灰 1点、安山岩鋳 10点、鉄平岩 1点、柘榴岩類 5点、針 1点、古銭焼け 1点、アルミ貨焼け 1点、硯 1点、陶器類 20点、硝子製品 15点、釘 1点、学徒の生爪と生皮 1点、セメント製品 3点、黒雲母片麻岩 1点、溶解状となった瓦 6点、瓦類の変化各種 15点、基石 1点、合計 100点

C. 原爆障害者関係展示資料

1. 図板	1. 総体的説明	1枚
	2. 眼科	2枚×2
	3. 内科	1枚+6枚+1枚
	4. 健康管理	1枚
	5. 原爆障害者治療対策協議会の活動	1枚
2. 写真	1. 眼科	4枚+6枚
	2. 外科	5枚+15枚+10枚
	3. 内科	若干
3. スライド	1. 白血病	2枚
	2. パシチー症	2枚
	3. 赤血球	2枚
4. 展示物	ケロイドを外科手術したものの肉片（アルコール漬）	

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示

は、こうした意識の変化が認められる。言い換えれば、専門家や研究者を対象とした原爆参考資料陳列室や原爆記念館では彼らに資料を公開する「陳列」が行われた。それに対し、東京原爆展は「治療対策の重要性を強調し、政府の支援を強力に要請する」世論喚起を目的に、一般来場者向けの資料を「展示」したのである。

次に、それにともない注目すべきは、【表3】中Bに分類された「被災物（一般）展示資料」の内訳である。「衣類、時計、靴」といった日用品がリストの上位に並んでいる。それに対し、「安山岩鉱、鉄平石、柘榴岩類」や「瓦類の変化各種」はリストの低位にあり、総数も四〇点足らずにとどまっている。【表3】中Bの被災物一〇〇点に占める割合は確かに高いが、【表2】「2. 被爆物品」のうち「瓦、石、硝子等」二、〇〇〇点に較べれば格段の比率の低さである。また【表2】「7. 遺留品」では、単に「衣服、所持品等」としていたものが、【表3】では、衣類や時計から陶器類に至るまで生活に身近なものが細かく分類されていることにも注目しなければならない。東京原爆展は、その趣旨から、生活実態も含め、原爆被災者に焦点を当てている。長岡が、都築正男も関与したであろう本展によつて被爆者と被爆時の彼らの生活に目を向けるようになったことは、想像に難くない。こうしたなか、【表3】Aの4にある「スライド 原爆と広島」が、別に項目立てされている。この度の遺族からの寄託品には、このスライド上映に同期する音声シナリオも含まれていた。

三―三、人的被害への言及——スライド『原爆と広島』シナリオ

シナリオには、オート・スライド一一九枚分の解説が用意されている。最初の原稿は、「このスライドを映写する

に当り、皆様と共に今は亡き原爆の犠牲となられた幾多の広島市民のために謹んで哀悼を捧げませう」という文に始まっている。つまり、このプログラムが、まずもって、原爆死没者を念頭につくられたことを宣言している。

次に、「これは在りし日の広島城天守閣の雄姿である（スライド二一三）」という語りから、城下町として広島には四〇〇年の歴史があったこと、日露戦争に際し、その城址に大本営が置かれたこと（スライド四）が説明される。広島が軍都として栄え、産業奨励館をはじめとする繁華な街並みの写真がそれに続く（スライド五一―一八）。奇石、珍木の配置に妙がある縮景園や太田川の清流、比治山の展望に触れた（スライド一九―二二）後、忠霊塔、護国神社、宇品港や市役所を背に写る将兵や学徒出陣の写真（スライド二三―二七）によって再び軍都・広島を想起させている。原爆参考資料陳列室や原爆記念館では触れられなかった被爆前の広島 of 歴史と自然、そこで営まれていた生活に関する解説である。とりわけ、日露戦争以降、この街が軍都として繁栄してきたことを強調している。

「運命の日、昭和二十年八月六日がやって来た。この日広島は絶好の快晴、朝風の高くのぼった太陽が暑く照りつけていた」というナレーションが入るのは、二八番目のスライドである。スライド二九で、「天に冲せる巨大な原子雲の下で有史以来地上最大の惨劇」が起こったナレーションが入り、スライド三〇から三三で、その「死者二十数万人、負傷者十数万人」に及んだことを伝えている。

スライド三四から六三までは、破壊された街並みや建物の写真が続き、その都度それらの爆心地からの距離が伝えられる。それらはまた、スライド五から一八で紹介された、かつては繁華であった街並みの被爆後の姿を示すスライドでもある。

シナリオが、人的被害について語り出すのはスライド六四からである。「病院部隊、或は学校等に収容された」怪

我人の多くが、「手の付けようもなく……死んで行った」ことが被災者収容所のスライドに被せて語られる。また、「幸いわずかな傷で済んだ人々も数日後には頭髮が抜け口から血の塊を出しながら苦しみ、もがきながら死んでいった」ことも伝えている。

スライド六七からは、ケロイドをはじめとする外傷を負った人の描写となる。そしてここでも、手の施しようがなかった窮状が告げられている。八〇番代から九〇番代にかけては、「肉親、知人の安否を尋ねる人々」が紹介される。「死亡者、収容者の貼紙を一心にみる」人（スライド八八）や、「ビルの壁に行先を告げる傷付いた人の必死のツメアト」（スライド八九）などがそれに当たる。これらは、被爆後を生きる人々の心的外傷に注目したもので、以前の長岡の発想にはなかつたものである。

長岡が専門とする「墓地内の飾石が熱線を受けて、黒雲母片麻石の表面が熔解し新しく硝子質が出来た」ことを伝えるスライドが登場するのは、ようやく一〇一番目である。それも、次のスライド一〇二の「着物の模様が皮膚に焼きついた」婦人のケロイド症を際立たせる役を担っている。その後も、放射熱線を浴びて帰らぬ人となった兵隊（スライド一〇三）、シュミーズの縫目が熱線で焼きついた婦人（スライド一〇四）が続く。さらには、「被爆後一週間目から頭の髪が抜け出した」女の子（スライド一〇七）、男の子（スライド一〇八）が映し出される。これらの写真は、いずれもすでに HIROSHIMA に掲載されているが、同書ではキャプション程度の説明しかなされていない。前後の文脈も含め、原爆被災者の細かい描写がなされているのが、スライド『原爆と広島』シナリオの特徴である。長岡が、HIROSHIMA の執筆、編集を終えた後、東京原爆展準備にあたり、このシナリオを書き上げたことが、原爆被害に対する地質学者としての関心から、人的被害について語り出すきっかけになったことは、間違いない。

スライドは一〇九番から、再び、爆心地からの距離とそこにあった建物の損傷を告げる内容に変わり最後の一一九番まで続く。そして、ナレーシヨの最後の一節は、以下のとおりである。

科学対人間の闘争は開始された。何ものにもめげず、音も高らかに廃墟の中から新しい広島歴史は始まった。地の中から天の頂から無限のハミングが力強く「ノー・モア・ヒロシマズ」を訴えている。

長岡は、自身が地質学の学者であるにもかかわらず、ここでは科学を人間に対立するものとしている。「ノー・モア・ヒロシマズ」という広島流川教会牧師の谷本清に端を発する平和運動キャンペーン用語に依拠して、科学ではなく人間による「新しい広島歴史」の始まりを告げている。そのことで、自らが合理的判断よりも、道徳的判断にしたがう境地に入ったことを示している。

四、広島平和記念資料館の開館と初期展示

四―一、広島平和記念資料館条例の公布・施行

『中国新聞』が日本赤十字社の東京原爆展を報じた一九五四年一月二十九日、同朝刊の別の紙面では、「原爆資料保存に本腰 広島市が条例案急ぐ」という見出し記事が掲載されていた⁽⁴⁾。ここでは、①「通称原爆資料館と呼ばれる市内基町の原爆記念館」は市教委の管轄であること。②その年間五万円予算は隣接する中央公民館の維持費とも

に計上されていること。③その専属職員は嘱託の長岡省吾一人であること。そして、④「半ば忘れられた存在」であることが述べられている⁴⁶⁾。こうした状況を改善するため、①主轄課を市教委から市長室に移すこと。②館独自の予算を組むこと。③職員は館長をはじめ数名の事務員を配置すること。④土曜午後と日曜の休館日を月曜日に切り替えることを（一九五四年）一二月の市会に提出する条例立案が急がれている、という内容が記事の趣旨である。先に述べたように、長岡と市長浜井の信頼関係によって、原爆参考資料陳列室は一九四九年九月末に開設されたが、この報道によれば、それを引き継いだ原爆記念館に対して浜井は、予算的にも、人員配置の上でも、決して十分な措置を講じていなかった。

また、原爆記念館は一九四九年六月一〇日に法制化された社会教育法にある公民館に付属していたため、同法に定められた条件を満たしていたとしても、博物館法（一九五一年一月一日公布、翌年一〇月四日施行）にある学芸員の配置義務などが無い、社会教育全般を担う施設の一部に過ぎなかった。加えて、一九五五年四月に行われた市長選で、市政に長岡を起用した浜井が落選する。代わって市長に就任した渡邊忠雄は、平和大通りにアパートを建設する公約を掲げるなど、浜井が推進した平和記念都市建設事業に歯止めをかけることを市政の方針としていた。

「広島平和記念資料館条例」が公布・施行されたのは、結局のところ、先の報道から八ヶ月以上が過ぎた一九五五年八月六日であった。その第一条には、「本市に広島平和記念資料館（以下「資料館」という。）を設置する⁴⁶⁾と書かれているのみである。つまり「設置」事実だけを述べ、「目的」については触れていない。第二条は、「位置」として「資料館は、広島市材木町に置く」と記されている。そしてようやく館の「事業」を示す第三条に、次の四項が示

されている。

- 一、原子爆弾による被災に関する物件、模型、写真、文献その他の資料を収集し、及び展示すること。
- 二、原子爆弾による被災に関する調査及び研究を行うこと。
- 三、原子爆弾による被災に関する案内書、解説書、調査研究の報告書を作成し、頒布すること。
- 四、その他市長において必要と認めること。⁽⁴⁾

つまり、資料館は「原子爆弾の被災に関する」三つ事業を行うために材木町に「設置」したことが、この条例の趣旨である。「観覧料」を規定した第四条には「資料館に展示する資料を観覧しようとする者は、別表に掲げる観覧料を前納しなければならない（傍点引用者）」とある。第五条には「資料館に特別の資料を展示した場合においては……観覧料は、市長がその都度定める額とする」とあり、第六条には「特別の調査研究をしようとする者は、市長の許可を受け……特別観覧料を前納しなければならない」とある。つまり第五条から最後の第一二条までの条項は第四条までのいわば附則に過ぎない。

以上の条文について指摘できることは、第一に、収集の対象に関して、先に触れた一九四九年二月の「請願書」では「一切の資料」としていたところを「模型、写真、文献その他の資料」（第三条第一項）と書き分けた点である。それは、原爆記念館で長岡がしたこと追認に過ぎない。第二にいえることは、被爆資料の収集・展示は、調査研究

のため（第三条第二項）と明示している点である。それを「観覧、しようとする者」すなわち、あえて観覧を望む者には代価を前納すればこれを許す（第四条）というスタンスである。以上のことから、広島平和記念資料館条例には、同館が原爆記念館以上のことは行わない方針が示されているといっても良い。日赤の東京原爆展が、「原水爆使用禁止に関する世論喚起に資するとともに、原爆障害者治療対策の重要性を強調」するため開催され、社会と政治に働きかけたのに対し、新設の広島平和記念資料館は社会との接点を積極的に結ぼうとはしなかった。少なくとも、条例の文面には、そのことが滲み出ている。

四―二、開館直後の展示

一九五五年八月二四日、『中国新聞』朝刊には、「きょう開館 平和記念公園内に原爆資料館」という見出しの記事が掲載された⁴⁸⁾。その書き出しは、「去る六日原爆十周年を期してフタあけた広島市中島町平和記念公園内の原爆資料館は、その後内部工事の最終仕上げを急いでいたがこのほど完了、二十四日正式開館する」というものである。前節で見たよう同館の正式名称は、広島平和記念資料館であるにもかかわらず、ここでは原爆資料館という通称が用いられている。その理由は、やはり前節で引用した『中国新聞』に「通称原爆資料館と呼ばれる市内基町の原爆記念館」とあることから、器（基町の原爆記念館、中島町の広島平和記念資料館）よりも、中身（原爆資料）と機能（保管）に市民たちの関心はあり、基町の館と中島町の館は、一貫したものとして捉えられていたことを物語っている。

「内部工事の最終仕上げ」とは、間仕切りと展示備品の整備を意味するのであろう。間仕切りに関しては、実施設

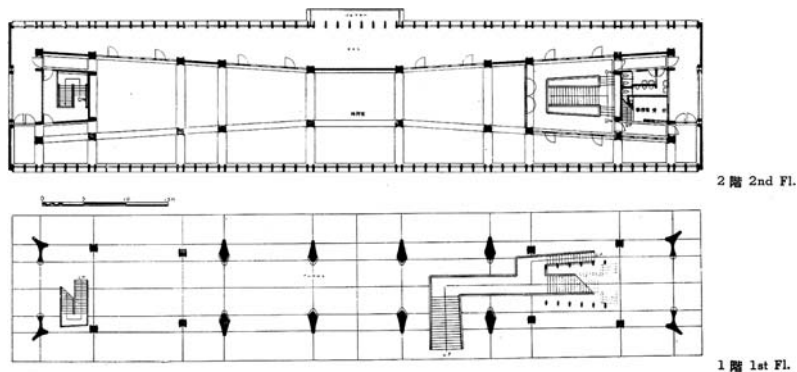


図12 広島平和記念資料館実施設計平面図



図13 広島平和記念資料館開館時の展示風景（西側から東側を望む）。写真提供：中国新聞社



図14 広島平和記念資料館開館時の展示風景（東側から西側を望む）

計が終わった段階で、丹下は同館のピロティを支える柱を直列から双曲線状に配列し直し、それに沿う大きな弧を描く構造壁を室内の東西に渡すことに決めていた（図12）。そこから北はテラスとして展示室からは除外する。先の記事に掲載された写真（図13）は、展示室の西端斜め上から撮影したものであるが、そこに写る内部には部屋を仕切る仮設の壁はなく、鉄柱とガラス板でできた簡素な展示ケースと解説図板や写真パネルを吊るす網状のフェン

スおよび、それらを立て掛ける木製柵状の傾斜台がならぶのみである。すなわち、内装工事にそれほど手はかけられていない。開館当時の展示室を捉えた写真は複数存在するが、そのなかには新聞掲載写真とちよūd対角線上に位置する東端斜め下から撮影した写真(図14)がある。そこには原爆記念館にあった被災した市街模型と思しきものが画面左手前に写っている。そして、その模型の一辺と平行にならべられたイーゼルに置かれた六枚の写真が目を引く。そこには被災した市内の光景が写っている。模型と被災した街並みの写真には、つながりがあるのであろう。来館者は、両者を対比しながら、被災状況を思い浮かべることができるといえる。ただし、ここには原爆記念館にあったような「感覚的刺激→観察→理性的判断」という思考連鎖は生まれえない。被爆鉍物類があまりにスマートにガラスケースに封じ込まれていて、触覚的刺激が喚起されない状態に置かれている。新しい「原爆資料館」は、総じて整然と並べられた展示備品が目立ち、肝心の被爆資料そのものは、まるで宝飾品のようにケースに納まっている。

言い換えれば、それはコマース的なインダストリアル・デザインや洗練されたモダンアートの展示会場のようである。そこで思い当たるのが、広島平和記念資料館設計者の丹下健三の存在である。事実丹下研究室は、同館開館前に日米抽象美術展(国立近代美術館、一九五五年四月二九日―六月一四日)やメキシコ美術展(東京国立博物館、一九五五年九月一〇日―一〇月八日)の会場構成を担当していた⁴⁹⁾。ところがその内実を調べてみると、前者の展示に関しては、複数の別の作家の抽象彫刻を一緒に床に直置きし、その脚元に白い玉砂利を敷いて一つの作品のように見せる展示を行い、後者に関しては、デモンニッシュな要素を取り入れた展示を行うなど、良きにつけ悪しきにつけ評判となっていた⁵⁰⁾。つまり、この時期の丹下は、すでに機能主義的な洗練から脱却していた。しかも、先にも触れ

た五五年四月の市長選で浜井が落選したため、八月の時点ではすでに広島の仕事から手を引いていた。したがって広島平和記念資料館開館時の展示に関し、丹下がそれに関与したという見方には無理がある。

では、それを主導したのは長岡省吾であったかというと、これもそうとはいえない。というのも、まず先に見たように、広島平和記念資料館開館時の展示は、ケースや傾斜台など展示備品が主導していて、あまりにも資料そのものが疎かにされている。それに加えて、開館三〇年を期に同館が発行したパンフレットによれば、長岡が同館館長に就任したのは、(先の『広島県大百科事典』の記載とは異なり)開館年の九月五日であった⁵⁴⁾。同書によれば、広島平和記念資料館は、同年八月六日に「助役直属として」設置され、同月一八日には「助役直属として」平和記念施設管理事務所が設置され、資料館もその所属となる⁵⁵⁾。つまり、平和記念資料館開館時に、この施設は、あくまでも「助役直属」であった。さらに、この時点で基町の原爆記念館が存続していた以上、長岡にはそれを管理運営する義務と責任があった。となると平和記念資料館開館時の展示に関して、丹下でも長岡でもない、第三の人物が主導権を握っていたことになる。

四一三、飯沼一省の意見書

では、それが誰であったか特定することは難しい。ただ、広島平和都市建設専門委員会委員長を務めた飯沼一省が同委員会の意見書として、以下のようなことを公式に書き残していることは注目に値する。

原爆によって破壊された物品陳列所の残骸はその現状決して美しいものではない。平和都市の記念物としては極めて不似合いのものであって、私見としてはこれは早晩取除かれ、跡地は綺麗に清掃せられるべきものであると思う。原爆による被害の実況については写真記録等によることとし、これを新たに建築せらるべき陳列所に保存すればそれで足りるのであって、この醜い物を新たに建設せられる平和都市の中心に残しておくことは適当とはいひ難い。⁵³

ここでいう「物品陳列所」とは、原爆ドームのことを意味し、平和記念資料館の展示について、直接言及する文書ではない。しかしここで、このついでに触れられた「原爆による被害の実況については写真記録等によることとし……陳列所に保存すればそれで足りる」という見解は、会の性格とその委員長発言として、それなりの影響力を持つたはずである。事実、同委員会は後に平和記念公園内に設置する慰霊碑に関して、イサム・ノグチ案を強硬に退ける発言力と実行力を発揮した組織であった。また、そもそも飯沼は一九四九年に制定された広島平和記念都市建設法の案提出に尽力した中心人物の一人であった。その飯沼が、原爆ドームを「平和都市の記念物としては極めて不似合い」と思い、資料館の展示物は写真記録等で足りるという考えを公にしていた意義は大きい。というのも、浜井との市長選に勝った渡邊は、新設された平和記念資料館に多くの予算をかけずに済む根拠を他でもない広島平和都市建設専門委員会委員長の意見書に求めることができたからである。

そして、予算を節約する上で、その具体的方策として想定できるのが、前年暮れに日赤で開催された東京原爆展の

ために作製した解説図板や写真パネルの転用である。というのも、先に挙げた当館の開館を報じる『中国新聞』の記事の最後には、「同館は当時の惨状を示す資料数百点が陳列されている」とあるが、これは、前章でみた東京原爆展の報道記事にある「被災物百十点、それに写真、図版、スライドなど四百八点」とした内容にほぼ合致する。会場写真(図14、15)を見る限り、その図板や写真パネルの多さ(東京原爆展では四〇八点)と展示ケース内にある資料の少なさ(同じく一一〇点)から、東京原爆展の出品された物がそのまま開館時の展示に利用されたと思えるほどである。

「助役直属」で、丹下も長岡も不在のままに開館を迎えた平和記念資料館は、基町の原爆記念館から被災した市街模型の持ち込んだもの、おそらくは前年日赤で開かれた東京原爆展のために作製した展示造物を大いに活用した。その結果、備品は洗練されていたが、出品された資料は互いのつながりを欠く展示となった。

五、原子力平和利用博覧会広島展の開催とその後の展示

五―一、原子力平和利用博覧会の開幕と寄贈申し出

広島平和記念資料館の開館から二ヶ月あまり経った一九五五年一月一日、東京日比谷では、アメリカ大使館と読売新聞社の主催による原子力平和利用博覧会が始まった。会場を施工した乃村工藝社によると、それは「日比谷公園に約一四八七平方メートルの鉄骨ジュラルミン張りの展示館を建て、館内には一五部門に分かれて、原子力の初歩か

ら難解な原子炉原理に至るまでの高い知識を、分かり易く模型やパネルで解説した」⁶⁴展覧会であった。同展は翌月一二日の閉幕までに三七万に迫る入場者を得、その後五六年一月一日から五七年八月一八日まで名古屋、京都、大阪、広島、福岡、札幌、仙台、水戸、高岡を巡回する。名古屋は中日新聞社、京都・大阪は朝日新聞社、広島は中国新聞社といった地方ごとの有力紙がアメリカ大使館とともに主催に入り、会期中はもとより、それ以前から展覧会に関するキャンペーンを展開した。総入場者数は二六三万七、〇〇〇人に達したが、それにも増して、二年に迫る長きにわたり、全国各地で本展に関する報道がなされたことが、大きな意味と影響力をもった。

同展をメディア・イベントとして分析した井川充雄によれば、「この博覧会はアメリカの対外プロパガンダ戦略の一環として開催されたもの」⁶⁵で、日本における本展の黒子役を果たした柴田秀利によれば「費用は一切向こう持ち」⁶⁶であった。主導者は「合衆国の目的や政策を他の諸国の国民に広め、合衆国の指導者に外国の世論を伝える」⁶⁷ため、一九五二年八月に設立された USIA (United States Information Agency) である。「目的遂行のために、各国のアメリカ大使館・領事館などに優先機関として」⁶⁸設置された USIS (United States Information Service) が実務を担当した。

当時の「合衆国の目的や政策」はアイゼンハワー大統領が一九五三年一月二日八日に国連総会で行った「アトム・フオア・ピース」演説の推進にあった。つまり核兵器削減と核エネルギーの平和利用を表向き目標に、その内実は米国外の核兵器保有国に対する管理体制を確立し、米国の原子力民用技術の諸外国への売り込みにあった。こうした任務を遂行するため、日本人の核イメージを爆弾から平和利用に塗り替えることといち早く日本で原発を稼働させることが優先課題となる。被爆国を原発推進国に変えることが日本以外の国に対する強烈なアピールになるからであ

る。わけても広島で、そのなかでも原爆被災資料を収集展示する平和記念資料館を原子力平和利用博覧会の出品物で埋めることが、直接的で効果的という発想は、担当者となれば誰しも思い描くところとなった。

「惨禍を超え平和原子力博物館へ 生れ変わる原爆資料館 米国や国内から資料集る」という見出し記事が『中国新聞』に掲載されたのは、原子力平和利用博覧会東京会場の最終日前日にあたる一九五五年二月一日であった。そこには「広島市の原爆資料館に現在東京で開催中の原子力平和利用展の適当と認められる展示物が米国大使館（ロバート・ホームズABC所長の計らいで寄贈されることになった」（読点の追加は引用者による）ことが報じられている。続いて、同月一七日から二〇日までABC所長と長岡が東京の米国大使館に向き、彼ら三者の協議で選んだ展示物が米国で再制作され資料館に寄贈されると伝えている。それに加えて、名古屋大学が「アイソトープの利用」に関する文献を資料館に寄贈したこと、東京中央気象台による全面協力の申入れがあることを報じている。

これらのトピックを受け、記事を締めくくる長岡の談話が注目に値する。そこには「いままではただの惨禍の跡をとどめる資料に止まっていたが、各界からの協力で館名にふさわしい世界的な平和原子力博物館にまで発展してゆく機運にあることは本当にうれしい」と記されている。今日の視点に立てば、アメリカによる寄贈申し出は、「計らい」ではなく、広島市民の核イメージ転換を謀る方策であったことは明白である。長岡を東京に出張させ、三者協議させたのも、彼を懐柔するためであろう。「平和記念資料館」が「平和原子力博物館」に発展してゆくという発言が、長岡の口から出たとすれば、彼もまたその策に嵌ったと判断されても致し方ない。

ただ、『中国新聞』が右記の報道にからめて、広島で原子力平和利用博覧会を開催する旨を伝えていない点は留意しておく必要がある。それは同社がこの時点で原子力平和利用博覧会の予告を打てなかったことを意味している。

五―二、原子力平和利用博覧会広島開催の経緯と会場構成

一九五六年五月二七日、原子力平和利用博覧会広島展が開幕した。主催に入った中国新聞社は、同紙の同日夕刊社会面全面を用いて、関係者の対談形式で本展を紹介する。そのなかには広島市助役・佐々木銃の発言として、次のようなものが含まれていた。

原子力平和利用博覧会を広島でやろうという話は、前市長や高山助役時代からあったが、いよいよ具体化したのは去年の事でした。わたしも東京で、主としてその設備や規模がどれだけのものを見てきた。建物まで全部博覧会用に新設すれば、大きな費用がかかるし、既存の建物を代用すれば催物の六、七割しか使えないのが普通で、そういう場所として広島では平和記念公園内の資料館と記念館しかない。ところが市条令マツからいっても、原爆の資料展示は会期中も中止できない。それで会期中は、原爆資料を基町中央公民館に移すことになった。もちろん広島は原子エネルギーの観察力の面で後れることのできぬ因縁のある土地だからこそ、なをさらその平和利用の面をも十分に知る権利がある。また広島は中国地方の代表都市であるし、各地から広島はこの博覧会を見に来る人は、その足で基町に行つて原爆資料のほうも見てこれる。⁶⁹⁾

ここから読み取れることは以下の四点である。①広島における原子力平和利用博覧会開催は、同展の東京会場開幕前に具体的検討に入った。②平和記念資料館と記念館を会場とすることは佐々木助役の同展東京視察後決定した。③その決定にあたり、広島平和記念資料館条例が障害となった。したがって、④前節で触れた同展展示物寄贈申し出の

時点で平和記念資料館を同展会場にするとは決まっていなかった。

要するに、同館を原子力平和利用博覧会の会場とする話と同展览展示物を再製作して寄贈する話は同時進行していたようである。ただUSISは、前者に関する交渉相手を渡邊市長と佐々木助役に、後者に関しては長岡を選ぶ使い分けをしていた。渡邊と佐々木は平和記念資料館条例第三条第四項（その他市長において必要と認めること）を盾に同館を原子力平和利用博覧会会場にする案の強行突破をしたようである。

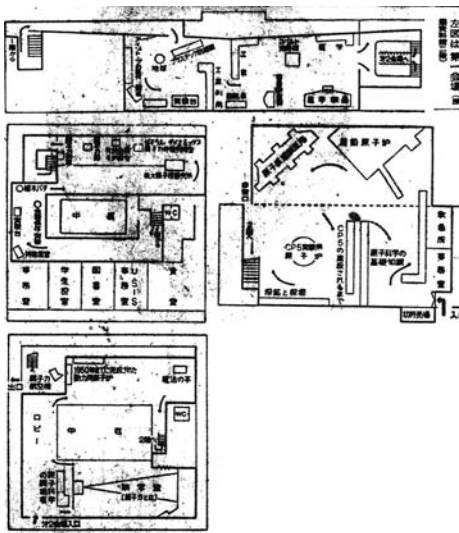


図15 原子力平和利用博覧会広島会場展示配置。写真提供：中国新聞社

開幕日に新聞に掲載された会場図面（図15）は、広島展が東京展と同規模で開催したことを示している。その内容を東京会場の説明文によって改めて紹介すると以下のようになる。

第一部は「原子科学の先覚者」として一〇名の科学者を紹介したもの。その一人は湯川秀樹だった。第二部は映写室で「原子の基礎知識および原子力平和利用に関する映画」の上映。第三部は、原子炉模型やパネル展示による「原子力の手引き」、第四部と第五部に

は、それぞれ「黒鉛原子炉」の模型と「電光式核連鎖解説装置」の展示、第六部は「アイソトープの取扱い」として機器類の展示、第七部は「モデル実験室」である。第八部から第一一部は、それぞれ「工業面のアイソトープ利用」「医学面のアイソトープ利用」「農業面のアイソトープ利用」「食料保存」と題して、各種模型パネルが展示された。第二二部は「教育と研究」だがCP5型原子炉の実物大模型、放射能を帯びた物質を遠くから扱うためのマジックハンドなど多彩な内容。第一三部は「動力」で「原子力列車と原子力発電所」のジオラマや「原子力商船」や「原子力飛行機」の模型など。第一四部は「ウラン鉱業室」。そして、第一五部の「読書室」には原子力関係の文献が納められた。⁶⁰⁾

これを広島会場に照らし合わせると順番が大きく変わったことがわかる。広島展第一会場は、資料館の下に設けられた仮設の展示室（図15中右）で、東京展では第二部の映画上映で紹介した「原子科学の基礎知識」の解説図板で始めている。続いて、黒鉛原子炉模型と電光式核連鎖解説装置、さらにはCP5型原子炉の実物大模型が展示され、これらは東京展の第四、第五、第一一部にあたる。そこには「採鉱と採掘」という東京展第一四部の「ウラン鉱業室」に相当する表示もある。左（西）側の階段を上り第一会場は続く。資料館会場（図15上）の最初の部屋には「アイソトープの取り扱い」とあり、東京展第六部に相当する。続いて「実験台」「工業」「医学」などの文字が見え、第七部から第一一部の内容が紹介された。第二会場となった平和記念館（図15下）は、東京会場第一部の「原子科学の先覚者」に始まっている。続いて「原子力とは」と題した映画の上映会場があり、手前のロビーはその控室となっている。そこに「魔法の手」と訳されたマジックハンドの実演展示が続く。記念館二階（図15中左）が最後の会場で、そ

こは図書室や食堂で来場者に一息入れさせ、その後、原子力商船や原子力飛行機の模型で彼らに夢を抱かせ、見送る順路になっている。同じフロアにUSGS 控室があることも見逃せない。大まかにいえば、東京展ではひと連なりで紹介した一五部門を、広島では二組に分け、導入↓専門↓未来像というパターンを繰り返して見せている。東京会場と広島会場は、展示の順番が大いに異なったが、来場者に対して変わらぬ強いメッセージを伝えた。「原子力は長寿と繁栄をもたらす新時代のエネルギーである」と。

五―三、平和利用博覧会後の新たな展示——土門拳『ヒロシマ』に写る広島平和記念資料館

原子力平和利用博覧会広島展は、一九五六年六月一七日に終了する。その後、広島平和記念資料館の展示が、いつどのように復されたかは定かではない。わかっていることは、同展会期中、同館から被爆資料が移された基町中央公民館が、七ヶ月後の一九五七年一月七日には移転を余儀なくされたことである。先述のとおり同公民館には原爆記念館が附設されていた。それらの敷地は広島市民球場建設用地となり、その日、建屋の立ち退き工事が始まったのである⁶⁰。したがって、それ以前に資料は戻され、広島平和記念資料館では新たな展示が始まっていた。

一九五七年七月二三日、土門拳は、「うまれて初めて広島土を踏んだ」⁶²。それは、「週刊新潮」のグラフを撮りに……『商売』のひとつとして行った」仕事であったが、その後、彼は「商売」抜きにこの街を撮り続けることになる。到着翌日には、奇しくも広島市民球場で落成記念試合が開催された。つまり、土門がカメラに収めた平和記念資料館はすでに「新たな展示」を始めていた。とはいえ、土門の写真集『ヒロシマ』に掲載された資料館内部の写真

解説がなされている。



図16 土門拳『ヒロシマ』（1958年）より
額装された被爆衣服



図17 土門拳『ヒロシマ』（1958年）より
ガラスケースに入るマネキン

は、見開きに掲載された三点に過ぎない。

そのうち左頁下に掲載された写真（図16）には、額装された上衣やズボンが写っている。額のなかにはハガキ大から半紙ほどの大きさの説明書きが付されていて、そこには服を身につけていた人の当日の状況と居た場所の爆心地からの距離、服の寄贈者の住所氏名など、数行にわたる

右頁上に掲載された写真（図17）には、資料館南壁のグラスウォールを背に中型ガラスケースに納まる膝から上の等身大人形が三体写っている。逆光のため細部は確認できないが、それらは被爆により焼けた衣服をまとった女性のマネキンであろう。ケースの中には、傾斜をつけて立てかけられたパネルがあり、やはりそこでも、服の謂れが説明されていたと思われる。右頁下に掲載された写真はマネキンの入ったガラスケースを横から捉えている。その右横に

は格子状の網を張ったフェンスに同じ規格の額が吊るされている。

石材や瓦など採集資料を並べていた原爆参考資料陳列室や原爆記念館はもとより、東京原爆展や平和記念資料館開館時においても、額装された服や焼けた衣服をまとったマネキンを大きく取り上げた展示は確認できない。それらは、原子力平和利用博覧会広島展終了後に同館に現れた、新たな被爆資料の提示の仕方である⁶³。

土門が、「商売」を抜きにした写真集『ヒロシマ』を刊行した理由は、「13年後の今日もなお『ヒロシマ』は生きていた」⁶⁴ことを伝えるためであった。「ヒロシマ」を忘れていたというより、実ははじめから何も知ってはいなかった土門は、この地を訪れ、「人間の肉体に刻印された魔性の爪跡は消えずに残っていた。……それは13年前の被爆当時よりはむしろ陰険執拗な魔性を人間の上にはしりまましていた」⁶⁵ことを知る。そして、「原爆の犠牲者に対する一般国民の同情と擁護をうながす」⁶⁶社会参加として同書を出版した。そのため、同書に掲載された写真の被写体の大半は、原爆病院の患者など被爆後の「ヒロシマ」を生きる人々である。そうした意味で、土門は平和記念資料館を訪れた際、服や人形など人間の肉体に直接関わるものには興味を抱かなかったのかもしれない。さらにいえば、写真における「社会的リアリズム」を標榜する土門にとって、被爆者を再現した人形は被写体として満足ゆくものではなかったかもしれない。それゆえ、逆光や反射の映り込みのなかでそれらを撮影したのであろう。

とはいえ、それでも土門の社会的関心に応えることができたからこそ、被爆衣服や人形は彼の被写体になりえた。

スライド『原爆と広島』シナリオのなかで、被爆後を生きる人々の心的外傷にも意を注いだ長岡は、こうした新しい展示によって、平和利用博覧会後の資料館に被曝の実態を伝える要素を付け加えたのである。被爆者の服の説明書きに付された寄贈者の住所氏名は、わずか一行の字面であるが、見る者の心を揺さぶるものがある。

六、原子力科学館以降の平和記念資料館

六一、長岡省吾の原子力科学館シナリオ

市民球場の建設が進む一九五七年二月中旬、広島市幹部の間では「一年後の……陽春を期して、復興と産業文化の進展に資するため博覧会を開催」⁶⁷⁾する計画が持ちあがった。準備期間が短すぎると反対意見も出たが、二月末には、翌年四月一日から五月二〇日までを会期として、平和記念公園と平和大通り一帯を会場に、テーマ塔、復興館など二〇施設を開設する開催要項がまとめられた⁶⁸⁾。同要項は三月の市議会で承認され、五月六日には博覧会事務局が平和記念館内に設置される⁶⁹⁾。準備期間は一ヶ月を切っていたが、二年後の選挙を見据えた現職市長の渡邊が強硬にその実現を主導した。

同博で平和記念資料館は原子力科学館として構想された。その趣旨は「原子科学の初歩からその平和利用までを誰にもよくわかるように、やさしく解説し、原子力の基礎知識を与えることを眼目とした」⁷⁰⁾と記されている。要するに市幹部は一年前に開催した原子力平和利用博覧会の再来を望んだようである。復興博全体の出品方針は、「見て楽しいものにする」とともに、「教育の場とすること」や「館内通路におけるアクセントの賦与とその分布に留意するこ

と」、あるいは「陳列に出来得る限り動きを与える」ことなどとされた⁷²⁾。各館担当者は、館のシナリオの第一次素案を五月中に提出するよう求められた⁷³⁾。

この度の長岡の遺族からの寄託品のなかには、長岡による「原子力科学館シナリオ」も含まれている。そこに作成日の記載はないが、右に見た経緯から、五七年五月以降の文書であることは間違いない。その全文は以下のとおりである。

I. 館の規模

四二九・六坪（資料館二階を使用）

II. 展示物の配置

(イ) 啓蒙部門

三〇坪

(ロ) 原子力の破壊的威力を示す部門

一五〇坪

(ハ) 原子力の平和利用に関する部門

一八〇坪

計 三六〇坪

III. 本館設置の趣意

二十世紀後半に入った現代は、人類文明史上未曾有の変革の時期にある。即ち第三の産業革命といわれる「原子力時代」を迎えたのである。本館は、現代人の誰もが大きな関心をもっている原子力科学の諸問題を特に広島が世界史上最初の原爆被災地である事績に立って大衆的にわかり易くとき明かす。

IV. 内容

(i) 啓蒙部門

「エネルギー利用と人類文化の向上」についての歴史的発展関係を解き、今日ようやくその黎明を迎えた原子力利用の基礎教養、即ち「原子」「放射能」「アイソトープ」「原子核分裂」「連鎖反応」などについての一般的初歩的知識を得る場。

(ii) 原子力の破壊的威力を示す部門

主に資料館に現存する被爆資料を展示して、広島市の被爆状況をくわしくみせる。さらに長崎の被害者との比較、ビキニ水爆実験とその影響（核爆発実験と放射能との問題）、及び世界の諸強の原水爆兵器、武装競争の事態並びに防御手段などの資料を収集展示する。ここでは、人間の道徳的欠陥によって科学が悪用され、戦争と結びつけられた場合に人類にもたらされる害毒はどんなものであるか、実物、写真などによって十分に認識できる場所が展開される。

(iii) 原子力の平和利用に関する部門

原子力の破壊的威力を見た眼を一転して産業における平和分野をみようとする。内容物は、わが国の原子力開発の現況を一堂に集めようとするもので大阪毎日新聞社の提携斡旋を得ているものである。各種図板、模型および原子力応用機器具など出品物は主に原子力産業会社が所有するものの貸与出品を求めるが、全国優秀一流メーカーを網羅したものである。なお原子力の分野での先進諸国のものをできるだけ多数採り入れる。特にアメリカからは相当膨大な展示物の寄贈を受けており、ソ連邦、英国などの資料も織りまぜて時代のトップレベルをこの機会に飾る。ここでは、人間がその英知を縦横に駆使することによって科学を如何に究めることができたか、自

然との苦しい闘いをみごとに克服して、ようやく辿りついた今日の人類文化はどのように向上したかを展開することができ、又将来の輝かしい科学文化の発展について夢を託するに足る示唆を与えられる。

V. その他

原子力科学の展示とは別に、スペース（廊下）を利用して原爆犠牲者の冥福を祈念した芸術的 諸作物品（書画、彫刻等）や本市長の平和宣言メッセージ等を余録として展示する。

以上となる。本文書の意義とそれがどのように実現されたかについては、次節で取り上げる。

六―二、原子力科学館としての展示

長岡のシナリオでまず注目すべきは、「Ⅲ. 本館設置の趣意」において、「原子力科学の諸問題を……大衆的にわかり易くとき明かす」という文言の間に、「特に広島が世界史上最初の原爆被災地である事蹟に立って」という一文が入っている点である。「原子科学を……やさしく解説」することは、原子力科学館を最初に構想した市幹部が目指すところであった。だが、「被爆地である事蹟に立つ」発想は彼らになかった。しかしこの「事蹟」は、博覧会が「広島復興」を前提とする以上、無視できない。この一文を入れることによって、原子力と博覧会の前提が初めてつながる。こうした論理にしたがって、構想段階では想定されていなかった原水爆被害に関する部門をつくる必然性が生まれたのである。しかも長岡は、それに全体の四割を越えるスペースを与える案を提出した。

従来、広島復興大博覧会の「原子力科学館には、被爆体験の重さと『平和利用』の未来が共存していた」⁷³と指摘

されてきた。原子力が行使された過去から行使する未来へと世論を誘導したものとして、「『原爆の記憶』と『平和利用の夢』の接合」⁷⁴⁾がなされたという見方である。それ自体は誤りではない。しかし、誰がそうしたのかについては語られてこなかった。ところが、この度寄託された長岡のシナリオと広島市幹部の当初の構想を突き合わせてみると、両者を「共存」させ「接合」させた人物は、長岡であったことがわかる。過去の忘却のもとに未来を語ろうとした原子力科学館を過去の刻印のもとに未来を語る場に転換した意義は大きい。

会期終了後、広島市が報告書として刊行した『広島復興大博覧会誌』（以下『博覧会誌』と表記）に掲載された原子力科学館会場図面⁷⁵⁾（図18）を見ると、長岡がシナリオで記した「II. 展示物の配置」案は、ほぼそのまま実現されたことがわかる。順路にしたがい展示状況を確認する。「(イ) 啓蒙部門」では、まず「人類の進歩」が「わかり易い絵図解によって、第三の火発見に至るまで」⁷⁶⁾示された。続く「原子力とは」のセクションには、「連鎖反応模型」という字が見える。『博覧会誌』に掲載された「会場見である記」によれば、それは「核分裂から生ずるエネルギーの量を六〇Wの電球に託して教える」⁷⁷⁾装置で、原子力平和利用博覧会では「電光式核連鎖解説装置」と呼ばれていたものである。このように第一部門では、平和利用博出品物の再制作品が数多く並べられた。

「(ii) 原子力の破壊的威力を示す部門」で、まず目にするものは、高さ六mにもおよぶ「原子雲」の動的模型であった。「茸雲がもくもくと上昇してゆく様を電動機と照明の工夫によって再現」⁷⁸⁾したこの装置は、博覧会の出品方針にある「館内通路におけるアクセントの賦与」や「陳列に出来得る限り動きを与える」要件を満たすために新たにつくられた。被爆後の広島を示す直径五mの円型市街模型もこの会場に合わせてつくられたものである。ちなみに、復興博の展示施工は館ごとに装飾業者に委託され、原子力科学館は大阪市に本社がある日東建築社が請け負った⁷⁹⁾。市

原子力科学館

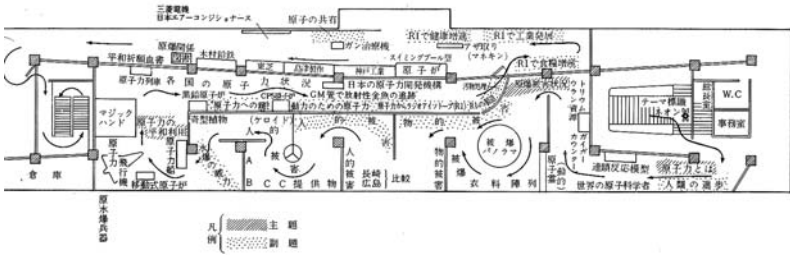


図 18 広島復興大博覧会「原子力科学館」会場図面

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示

街模型の背後の壁には、被爆一ヶ月後に撮影した市街の展望写真を引き伸ばして掲示した⁸⁰⁾。図面(図18)上、市街模型の下に位置する南壁沿いに「被爆衣料陳列」とあるのは、土門が撮影した額装された衣服やガラスケースに入ったマネキンであったと思われる。それらの位置は、土門の撮影時から大きくは変わっていない。このように第二部門では、新作模型と平和利用博後に始まった新しい被爆資料の見せ方による意欲的な展示が試みられた。

図面では「物的被害」「人的被害」と記されているあたりを「会場見である記」の記者は、「被害の実物や、記録写真や統計資料などが、各種各様枚挙の遑がない程展示されている」⁸¹⁾と一括りにして述べている。さりげない言い廻しだが、注意しておく必要がある。というのも、彼の意識には、熔解剥離した花崗岩や熱線で泡を吹いた瓦は、最早上がって来ない。会期五〇日で九三万人が来場した博覧会では「大衆的にわかり易くとき明かす」展示が前景化して、専門家を対象とした展示の地位が後退したことは否めない。

「アメリカからは相当膨大な展示物の寄贈を受けて」成立した「(iii)原子力の平和利用に関する部門」は、マジックハンドをはじめとする平和利用博覧会展示物が大きな場所を占めている。その一方、シナリオにもある「大阪毎日新聞社の提携斡旋を得て」、「原子力産業会社が所有するもの」や「全国優秀一流メーカーを網

羅した」展示も実現した。こうした事実は、長岡自身もまた、原子力の「平和利用の夢」を抱いていたことを物語る。長岡と市幹部はこの点で一致する。繰り返しになるが、両者の差は、前者が後者とは異なり、被爆を起点にした点である。長岡が問題にしたのは「原子力が道徳的欠陥によって悪用され」ることであった。

シナリオと会場図面の間で唯一齟齬があるのは、シナリオでは「V. その他」とされている箇所である。すなわち、「原爆犠牲者の冥福を祈念した芸術的諸作物品（書画、彫刻等）や本市長の平和宣言メッセージ」が図面には見当たらない。相当箇所には「平和祈念血書」とあるのみである。「博覧会誌」「会場見てある記」にもこの場所に関する記述がなく、詳細はわからない。ただ、「本市長の平和宣言メッセージ」が実際欠けていたとするならば、この展示において、長岡の意思が全うされたとは言い難い。

六―三、原子力科学館後の展示——『ヒロシマ・モナムール』に映る平和記念資料館

アラン・レネ監督による『ヒロシマ・モナムール』（一九五九年）は、暗闇で抱き合う男女の裸の肩が、かろうじて観客に視認できるなか、「きみはヒロシマで何も見なかった」という男のセリフに始まる映画である。「見なかった」という日本人の男に対し、「すべてを見た」とフランス人女が答える。レネにとつて、映画がこの会話から始まることが重要だった。なぜなら、ドキュメンタリー映画『夜と霧』（一九五五年）でアウシュヴィッツを取り上げて以来、レネは、第二次世界大戦中に起きた過酷な惨禍を表象することの可能性について、それを見極めることを自らの課題としていたからである⁸²。

「すべてを見た」という女の言葉を裏付けるため、この映画では広島市内の様子を丁寧に映し出している。原爆病

院、原爆ドーム、太田川、本町商店街などがそれにあたる。そして、映画開始から四分二四秒、平和記念資料館全体を北正面から捉えた映像が現れる。そこに「博物館には四度も行った」という女の声が被る。画面は資料館の西正面、次に南西からの仰角ショットに代わる。そして東にある階段が映り、それを順に上ってゆくショットが続く。つまり遠方から資料館に近づき、その入口に至る順でショットがつながれている。その後、以下にあげる資料館内部の映像が続く。

- ①ミラーボールを使った原子核模型の固定撮影 (4:37"-4:42")
- ②さこの雲の巨大図板と爆発時の状況解説図板が映る部屋の固定撮影 (4:43"-4:45")
- ③解説図板が吊るされた通路を歩く見学者の移動撮影 (4:46"-5:04")
- ④天井から吊るされた飛行機模型のクレーンによる回転撮影 (5:05"-5:11")
- ⑤被爆市街模型の回転ズームアウト撮影 (5:12"-5:20")
- ⑥爆風で折れ曲がったH鋼鉄材の移動撮影 (5:21"-5:29")
- ⑦床置き傾斜台にのる潰れた自転車の手持ち回転撮影 (5:30"-5:33")
- ⑧潰れた瓶の蓋の手持ち回転撮影 (5:34"-5:38")
- ⑨ケロイドのホルマリン潰け瓶の移動撮影 (5:39"-5:43")
- ⑩床置の被爆石材の移動撮影 (5:44"-5:51")
- ⑪脱毛した女性の髪束を上から下へパンしながらのズームイン撮影 (5:52"-5:56")

- ⑫ 写真パネルが展示される壁面のミドルショットから移動回転撮影 (5:57"-6:03")
- ⑬ 背中にケロイドを負った男の額装写真のズームイン撮影 (6:04"-6:07")
- ⑭ 被曝した第五福竜丸乗組員頭丁部の写真の下から上へのパン撮影 (6:08"-6:10")
- ⑮ ガラスケースに入ったマネキン四体の移動撮影 (6:42"-6:52")

レネは、本映画製作のため、一九五八年八月初めに広島に入り、六日の記念式典をはじめとする市内ロケハンを行った。主演女優と男優の到着を待ち、九月になってから撮影が始まった⁸³。広島復興大博覧会が終了して三ヶ月あまりが経っていた。したがって本映画には、原子力科学館としての展示終了後の平和記念資料館の展示風景が映っている。しかもその映像は、遠景から入口へ至る館外からの延長で、館内も順路通りにショットをつないだ可能性が高い。したがって、それを原子力科学館会場図



図 19 原子核模型 (『ヒロシマモナムール』より)



図 20 きのご雲巨大図板と爆発時の解説図板が掲示された部屋 (『ヒロシマモナムール』より)

面（図18）と突き合わせることで、当時の館の展示状況が、具体的に把握できるはずである。以下、それを試みる。

まず、①（図19）の「原子核模型」は、原子力科学館会場図面では右手の入口付近にある「テーマ標識ネオン」と見做して良い。階段吹き抜けに設置したそれを移動したとは考え難い。②（図20）に映

る「きのこ雲の巨大図板」は、原子力科学館の「動的原子雲」であろう。設置場所は特定できないが、④に映る情景から考えて、きのこ雲がある面を東に向けていたとわかる⁴⁴。③の解説図板が吊るされた通路を歩く見学者の場面は、二つのカットをつないでいる。前半、スラックスを履く男の歩みに合わせ移動するカットでは、途中まで男の背後に階段室の壁が見える（図21）。それを引き継ぐ後半の親子連れ見学者のカットでは、右手に南壁のガラスウォールが見える（図22）。このカットの解説図板には「原子力とは」という表題が確認できる。以上のことから、階段室の西に位置する展示室前半部は、原子科学の基礎知識を図板で啓蒙するスペースを広くとっていたことがわかる。



図21 スラックスを履いた男が歩く展示室（『ヒロシマモナムール』より）



図22 親子連れが歩く展示室（『ヒロシマモナムール』より）

④の飛行機模型の背後には②のきのこ雲が見える。原子力飛行機のかたちをしているが、ここでは、きのこ雲との関連でそれをB 29に擬しているようである。このカットの次に⑤の被爆市街地模型が映る(図23)。展示室前半部は、原子科学の啓蒙に広く使われたため、飛行機模型が浮かぶ「動的原子雲」の後

に登場する市街模型は、展示室の中央付近にあったと考えられる。

⑥の被爆H鋼鉄材は、南壁のガラスウォール前に置かれている。⑦⑧の自転車や瓶の蓋など「物的被害」を示すものが来る。これらの順番は、原子力科学館の会場に準じている。⑩⑫(図25)に映る被爆石材は被爆者の写真パネルの下に置かれている。物と人の表面変化を対照する展示である。⑪⑬⑭の实物と写真展示は、「人的被害」の酷さを、直接的に見学者に訴えかけるものである。このように後半部は、「物的被害」を大きいものから次第に小さいものへとつなげてゆき、物と人の対照展示を経て、「人的被害」の深刻さを伝える展示に至る順路が組まれている。

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示



図23 被爆市街地模型を見る見学者(『ヒロシマモナムール』より)



図24 ケロイドのホルマリン漬け展示(『ヒロシマモナムール』より)

およそ三〇秒の中断を経て、再び映しだされた資料館内部に、⑮のマネキン（図26）が見える。背後にガラスウォールが見えるが、そこにルーヴァーがないことから、展示室を出た北側テラスにそれらは並べられていたと推定される。映画に映る資料館はここで終わる。

土門拳の写真では判別しづらかったが、驚くべきことに、マネキンの顔は黒い布で覆われている。ところが一方で、その手先を見ると血染めで焼けたような加工が施されている。長岡は、採集被爆資料や模型や写真、さらには医療標本までも駆使して「最初の原爆被災地である事蹟」を伝えようとした。原子力科学館後の資料館展示は、いわばその集大成であった。その最後に、黒い布で顔を覆ったマネキンを置いた事実は示唆的である。それは、筆舌に尽くしがたい惨禍を展示で表象することの難しさについて、長岡はなお、煩悶していたことを伝えているかのように見える。



図 25 被爆者の写真および被爆石が並ぶ展示室（『ヒロシマモナムール』より）



図 26 マネキンによる被爆者再現展示（『ヒロシマモナムール』より）

おわりに

長岡省吾の経歴には未だ不明な部分が多い。旧制中学を卒業した少年が、なぜ満州に渡ったのか、その理由がわからない。また、満州時代の勤め先を挙げるができるが、その職務内容について、今の筆者は述べることはできない。しかし一転、原爆投下後の足跡は、この度の遺族からの寄託資料により、多くのことがわかるようになった。

原爆参考資料陳列室時代までの長岡は空中爆心地を特定することに腐心していたが、五〇年八月の原爆記念館開設にともない、被爆による物的被害の視覚化に意を注ぐようになる。遅くとも五二年夏までに完成させた被爆市街地模型はその典型であるが、開館当時所蔵していた物を一覧にした「原爆資料館保管簿」【表1】とその頃の将来像を示した「陳列物品一覧」【表2】の比較により、そのことを明らかにすることができた。次いで彼は、被爆による物的被害を増して、人的被害と精神的被害を重視するようになる。五四年開催の東京原爆展出品リスト【表3】と同展のために書いたスライド『原爆と広島』シナリオの文面から、それを跡づけることができた。

その一方で、長岡は、核エネルギーをめぐる時代の波にも翻弄された。平和記念資料館開館前に、市長が代わったことも大きかった。新市長が公布した資料館条例は、「原子爆弾による被災に関する調査及び研究」を謳ったが、実際、彼が行ったのは、資料館を原子力の平和利用推進キャンペーンの場とすることであった。新市長肝いりの広島復興大博覧会で、資料館が「原子力科学館」とされた際、そこに「最初の原爆被災地である事蹟」が残った意義は大きい。この度の遺族からの寄託品にあった「原子力科学館シナリオ」によって、それが長岡の発意によることを明らかに

にすることができた。

原子力科学館終了後の展示において、その「事蹟」は資料館に保たれ、レネの映画に止められた。その映画をもとに当時の展示状況がある程度本文で再現することができた。しかし、そこに映る黒い布で顔を覆われたマネキンで長岡が伝えようとしたことの意を汲むことを含め、彼の業績を真に精査する作業は、未だ課題として残されている。

註

- (1) 浜井信三「原爆資料館と長岡省吾」『原爆市長——よみがえった都市——復興への軌跡』ソフトプロジェクト、二〇一一年、一七四—一七七頁。石井光太「原爆の刻印——広島平和記念資料館秘史——」『すばる』二〇一五年九月号、集英社、二〇一五年八月六日発行、二二三—二二九頁。
- (2) 「伝えるヒロシマ 被爆70年 原爆資料館の礎 1万1890点 初代館長が収集調査 きょう寄託」『中国新聞』二〇一五年四月二〇日朝刊。
- (3) 『広島県大百科事典』下巻、中国新聞社、一九八二年、二〇〇頁。なお、本項目の執筆者名には「小堺吉光」と記されている。小堺は、広島市が一九七一年に刊行した全五巻の『広島原爆戦災誌』を執筆し、後に市史編纂室長を務めた人物である。
- (4) 中島毅「ハルピンのロシア人教育——高等教育を中心に——」『北海道大学21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集 第三集』二〇〇四年、六三—六五頁。
- (5) 越沢明『哈爾濱の都市計画 1890-1945』総和社、一九八九年、一九九頁。
- (6) 同右、二二三—二二四頁。
- (7) 同右、二四—二四九頁。
- (8) 麻田雅文「スターリンと石原莞爾——満ソ国境をめぐる攻防」『ロシア革命とソ連の世紀 2 スターリニズムという文明』岩波書店、二〇一七年、二四二頁。

- (9) 註(5)前掲書、九六―九七頁。
- (10) 長岡省吾「廃墟に付つ」『ひろしま』第三四号、広島鉄道局、一九五〇年八月一日発行、一四―一五頁。
- (11) 「十七 地質学鉱物学教室」『広島文理科大学創立五十周年』広島文理科大学創立五十周年記念事業会、一九八〇年、一八八頁。
- (12) 同右、一八九頁。
- (13) 同右、一八八頁。
- (14) 小島丈兒「石材と屋根瓦の被害から見た原爆」『大学人会研究論集1』一九五四年、七七―八〇頁。ただし、本稿が直接参照したのは以下の論文による。小島丈兒「第4節 地学分野——原子爆弾による岩石等の表面の剝離現象と溶融現象——」広島大学原爆死没者慰霊行事委員会編『原爆と広島大学「生死の火」学術編(復刻版)』広島大学出版会、二〇一二年、二七―三一頁。
- (15) 註(11)前掲書、一八九―一九〇頁。
- (16) 同右、一九〇頁。
- (17) 田賀井篤平『石の記憶 ヒロシマ・ナガサキ』智書房、二〇〇七年、三四頁。
- (18) 同右、三六頁。
- (19) 同右、三七頁。
- (20) 同右、三九頁。
- (21) 原子爆弾災害調査報告集刊行委員会編『原子爆弾災害調査報告集 第一分冊 理工学編』日本学術振興会、一九五三年。Watanabe, T., Yamasaki, M., Kojima, G., Nagaoka, S., Hirayama, K. Geological Study of Damages Caused by Atomic Bombs in Hiroshima and Nagasaki, Jap. J. Geol. Geogr., Vol.24, 1954.
- (22) 註(21)前掲和書、一一四頁。
- (23) 同右。
- (24) 同右。
- (25) 同右、および同書、一四九―一五〇頁。

- (26) 同書、一五七頁。
- (27) 同書、一五八頁。
- (28) 註(17)田賀井前掲書、一五一—一八〇頁。
- (29) 「眼みはる原爆資料——基町中央公民館に見学客おしかく」『中国新聞』朝刊、一九四九年九月二九日朝刊。
- (30) 「シリカ・ガラス送れ 南豪博物館から懇請状」『中国新聞』朝刊、一九四九年九月二九日。
- (31) 広島市長 濱井信三、広島市議会議長 任都栗司「広島原爆災害綜合復興対策に関する請願書」昭和二十四年二月(日付、及び宛名の記載無し)、広島市公文書館蔵。
- (32) 岩波書店編集部編『立ち上がるヒロシマ 1952』岩波書店、二〇一三年、一三〇頁。同頁の記載によれば、「現像日などを記録したネガ台帳やネガカバーを調べても、正確な撮影年月日や撮影者を知る手がかりはない。しかし、映画看板などから総合的に判断すると、一九五二年の春から夏にかけて、名取洋之助と長野重一が撮影したことは確かである」。
- (33) 写真の壁面積(一一・五㎡)をその総点数(四五〇枚)で割った結果得られる数字。
- (34) 長岡省吾『ひろしま 原子爆弾による被害状況』広島原爆記念館、一九五四年、和文二頁。なお同書の英文書き出しは、以下のとおり。8:15 am, August 6, 1945. Weather fine and cloudless.
- (35) 同右、和文二頁。
- (36) 同右、和文二頁。
- (37) 同右、和文二頁。
- (38) 同右、和文五—六頁。都道府県別生存者数のデータは、一九五一年の国勢調査に際し、GHQの要望で付帯調査された結果にもとづくもので、広島市は、その結果を五二年七月に譲り受けた。この詳細については、以下の文献を参照のこと。『被爆50周年 広島市原爆被爆者援護行政史』広島市衛生局原爆被害対策部、一九九六年、三一七—三一九頁。
- (39) 『被爆50周年 広島市原爆被爆者援護行政史』広島市衛生局原爆被害対策部、一九九六年、七六頁。
- (40) 『広島新史 年表編』広島市、一九八六年、一〇三頁。
- (41) 同右、一一—一二頁。
- (42) 『被爆学徒の生爪など——関心集める東京の原爆展——都民に訴えるその恐怖』『中国新聞』一九五四年一月二九日朝刊。

- (43) 「陳列」と「展示」の相違とその使用変遷については、青木豊『新装版 博物館展示の研究』雄山閣出版、二〇一二年、第三章を参照。
- (44) 「原爆資料保存に本腰 広島市が条例案急ぐ」『中国新聞』一九五四年一月二十九日朝刊。
- (45) 一九五一年『中国新聞』のアンケートによると、平和記念都市にふさわしい公共施設として原爆記念館を上げた人は、全体の3%に過ぎなかった。福岡良明「第一章 被爆の明るさのゆくえ―戦後初期の「八・六」イベントと広島復興大博覧会」福岡良明、山口誠、吉村和真編著『複数のヒロシマ』青弓社、二〇一二年、三一―三二頁。
- (46) 広島市条例第二十三号 広島平和記念資料館条例『広島市広報』第一一三号、広島市役所、昭和三〇年九月二〇日に発行、一頁。
- (47) 同右。
- (48) 「きょう開館 平和記念公園内に原爆資料館」『中国新聞』一九五五年八月二十四日朝刊。
- (49) 丹下健三、藤森照信『丹下健三 新建築、二〇〇二年、四七八―四七九頁。
- (50) 前者に関しては「(こえ) 日米抽象美術展をみて」『現代の眼 国立近代美術館ユース』第8号、一九五五年、七月号、八頁で「作家の同意又は指示がない限り、あ、いうことはすべきではない」と断じられている。
- (51) 『30年のあゆみ』広島平和記念資料館、一九八七年三月発行、五八頁。
- (52) 同右。
- (53) 飯沼一省「広島平和記念都市建設計画についての意見書」一九五一年八月六日。広島市公文書館所蔵『藤本千万太文書』C 1993-82。
- (54) NOMURA 博覧会 COLLECTION 原子力平和利用博覧会 http://www.nomurakougei.co.jp/expo/exposition/detail?e_code=713 [1] 〇一七年一〇月六日一七時〇八分閲覧]
- (55) 井川充雄「原子力平和利用博覧会と新聞社」『戦後日本のメディア・イベント [1945-1960]』(津金澤聰編著) 世界思想社、二〇〇二年、二五七頁。
- (56) 柴田秀利『戦後マスコミ回遊記』中央公論社、一九八五年、三三二頁(前掲、井川、二六四頁による)。
- (57) 註55井川前掲書、二五七頁。

- (58) 同右、二五八頁。
- (59) 「原子力平和利用博覧会開幕」『中国新聞』夕刊、一九五六年五月二七日。
- (60) 註(55)井川前掲書、二五〇―二五一頁。
- (61) 『広島新史 年表編』広島市、一九八六年、一三二頁。同年表の同年月日には「市民ナイター球場建設に伴う公民館移転工
事始まる」と記されている。
- (62) 土門拳『ヒロシマ』研光社、一九五八年、五頁。
- (63) 一九五七年四月に『朝日新聞』が撮影した同館展示室の写真には、露出展示のボロをまとう人形が写っている。『被爆60周
年記念事業』／広島平和記念資料館開館50周年企画展 廃墟の中に立ち上がる 平和記念資料館とヒロシマの歩み』展パンフ
レット、広島平和記念資料館、一九九五年、三頁。
- (64) 註(62)前掲書、五頁。
- (65) 同右。
- (66) 註(62)前掲書、六頁。
- (67) 「第一部 開催までの経過 三、博覧会開催までの経過」『広島復興大博覧会誌』広島市復興大博覧会誌編集委員会、一九五
九年、六頁。
- (68) 「第一部 開催までの経過 五、開催および企画の決定」註(67)前掲書、九―一〇頁。結果的には第三会場として再興された
広島城が設定せられ、博覧会のために設けられた施設は、三―一まで膨れあがった。
- (69) 同右。
- (70) 同右。
- (71) 「第一部 開催までの経過 六、準備 2 出品 (二) 出品計画」註(67)前掲書、二六頁。
- (72) 「第一部 開催までの経過 六、準備 2 出品 (二) 出品計画 (ロ) 出品準備作業」註(67)前掲書、三二頁。
- (73) 福岡良明「第1章 「被爆の明るさ」のゆくえ」福岡良明、山口誠、吉村和真編著『複数のヒロシマー 記憶の戦後史とメデ
ィアの力学』青弓社、二〇一二年、五六頁。
- (74) 同右。

- (75) 「第二部 開会 四、各館配置図 第一会場 2 原子力科学館」註67前掲書、一七九頁。
- (76) 「第二部 開会 三、博覧会の情景 会場見てある記 第一会場 2 原子力科学館」註67前掲書、九八頁。
- (77) 同右。
- (78) 「第二部 開会 三、博覧会の情景 会場見てある記 第一会場 2 原子力科学館」註67前掲書、九九頁。
- (79) 「第一部 開催までの経過 六、準備 2 出品 (二) 装飾業者の指定」註67前掲書、三五頁
- (80) 註(76)に同じ。
- (81) 同右。
- (82) 男の最初のセリフが生まれた背景として、レネはインタヴューで次のように語っている。「主人公の日本人の男は、自ら広島 の破滅を体験してはいないが、知識として理解している。その意識は持っている。映画の観客もそれと同じなのだ。そして我々も広島に一度も足を踏み入れたことがなくとも、このドラマの内面を知覚し、一体化することができるだろう。そういうテーマを持つて私はマルグリット・デュラスと会い、私の考えを伝えた。」(「アラン・レネ全自作を語る」『世界の映画作家5 ミケランジェリ・アントニオーニ、アラン・レネ』キネマ旬報社、一九七〇年、一八〇頁)。すなわち、男は知識としてヒロシマを理解した上で、「さみは……見なかった」と発言した訳だが、その際用いた動詞 *voir* は、「思い浮かべる」*se représenter*、*imaginer* とも言い換えることができる単語である。男は女に対して、たとえ理解したとしても、「思い浮かべてはくなく」(*ne se représenter pas*) と言っているのである。
- (83) アラン・レネ「マルグリット・デュラスへの手紙」港千尋、マリー・クリスティヌ・ドゥ・ナヴァセル編『HIROSHIMA 1958』インスクリプト、二〇〇八年、六二頁。
- (84) ④の場面では、きのご雲のある壁の背景に、それと直交するガラスウォールが見える。それは南壁であり、したがって、きのご雲のある壁は東を向いていることになる。

図版出典一覧

図1 【みんなの知識 ちよつと便利帳】地図上で目的地までの距離を測る

https://www.benricho.org/map_distance_driver/

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示

- 図2 原子爆弾災害調査報告書刊行委員会編『原子爆弾災害調査報告集 第一分冊 理工学編』日本学術振興会、一九五三年、一四五頁。
- 図3 同右、一四八頁。
- 図4 同右、一五三頁。
- 図5 『中国新聞』一九四九年九月二十九日朝刊
- 図6 『ひろしま公民館報 第1号』広島市中央公民館、一九五四年、五頁。
- 図7 岩波書店編集部『岩波写真文庫アーカイヴス 立ち上がるヒロシマ 1952』岩波書店、二〇一三年、三〇頁。撮影者：岩波映画製作所。
- 図8 同右、三三頁。撮影者：岩波映画製作所。
- 図9 長岡省吾 *HIROSHIMA-Hiroshima under Atomic bomb attack* 原爆記念館、一九五四年、写真頁一。
- 図10 同右、写真頁四―五の間の折り込みの部分
- 図11 同右、一七頁。右下の救護所の写真…宇品大和人絹跡曉部隊収容所…広島原爆障害対策協議会使用許可済。
- 図12 『新建築』第二九卷、第一号、新建築社、一九五四年一月号、一〇頁。
- 図13 『中国新聞』一九五五年八月二四日朝刊。
- 図14 広島平和記念資料館提供。
- 図15 『中国新聞』一九五六年五月二七日夕刊。
- 図16 土門拳『ヒロシマ』研光社、一九五八年、一二二頁。
- 図17 同右、一三三頁。
- 図18 『広島復興大博覧会誌』広島復興大博覧会誌編集委員会、一九五九年、一七九頁。

図19 『二十四時間の情事（『ヒロシマモナムール』）DVD（発売

元：アイ・ティー・シー）4:38⁰⁰

図20 同右、4:46⁰⁰

図21 同右、4:47⁰⁰

図22 同右、4:59⁰⁰

図23 同右、5:19⁰⁰

図24 同右、5:42⁰⁰

図25 同右、6:00⁰⁰

図26 同右、6:49⁰⁰

*本文の執筆にあたり、下記の方々のご協力を賜りました。ここに記して深く感謝申し上げます。

落葉裕信氏（広島平和記念資料館学芸員）、菊楽忍氏（広島平和記念資料館）、菅原麻子氏（土門拳記念館学芸員）、都築千重子氏（東京国立近代美術館主任研究官）、福島在行氏（広島平和記念資料館学芸員）〔五十音順〕。

追記

二二頁 図9 長岡省吾収集。

二三頁 図10 廃虚と化した広島市街、林重男撮影。

二三頁 図11 左下の写真 岸田貢宜撮影、岸田哲平提供。右上の写真 長岡省吾収集。

三四頁 図14 長岡省吾収集。

長岡省吾による被爆資料の収集・公開・展示

